因伯立志会物

鳥取佛教青年會編

特105
673

始

特105
673

內容人物

前文部大臣法學博士奥田義人……發明家松本元泰……元東京府知事松田道之……前彈正台大忠門脇重綾……天臺宗座主不二門智光……大日本郵船株式會社副社長加藤正義……京都大學病院長醫學博士伊藤秉三……故敎部大丞……移民事業新金治……法學博士貴族院議員桑田熊藏……新領土發展兒島幸吉……侯爵池田仲博……男爵名和長憲……熟心龜井甚三郎……前明治大學校長法學博士岸本辰雄……勤王正墻……大道叢誌社長川合清丸……前第百銀行頭取高田小次郎……子爵河田景與……老侯本井……太一郎……元愛媛縣知事本部泰……事業坂口平兵衛……名望佐伯友光……武士道鼓吹……信夫恕軒……女子美術學校長藤田文藏……忠烈須知源次郎……悲壯須山萬……名工宮本包則……漢學者伊藤宜堂……理學博士村岡範爲馳……開拓上山吉次……勤儉篤雄平……積善西尾柳衛……齒科大醫山村楳次郎……新聞元祖小泉忠藏……英文學の泰斗頭本元貞……公共山口嘉藏先覺者山桝直好……奮勵安住伊三郎……日本屈指の數學家樺正董……高僧日置默仙……伊丹甚太夫……田村貞彥……和田邦之助……神戸源內……川崎政之丞……堀庄次郎……安達清風……宮原積……景山龍藏……佐善元立……土肥實匡……山內衡……飯田年平……中島宣門……小谷古蔭……仙石隆明……石川貞元……尾崎孝基……沖剛介……增井熊太……高濱正義……大谷顯忠……前愛知縣知事沖守固……前諸陵頭男爵足立正聲……伊王野坦……豪勇詫間樊六……志士中原吉兵衛……醫學博士村上安藏……醫學博士藤田敏彥……醫學博士田中筠彥……法學博士加藤正治……法學博士佐々木惣市……哲學者西晋一郎……津田元道……細田謙藏

4
8.
4.
正
本
交
內

……橋田邦彦……津山三郎……遠藤金市……音樂家田村虎藏……岡野貞一……
文學者藤原喜代藏……伊藤銀月……生田長江……杉谷代水……男爵荒尾嘉就……
男爵荒尾之茂……前帝室博物館長森本後凋……俳人阪本四方太……岡田機外……安木
弘蔭……田中俊民……田中秋彦……田中長洲……松原二十三階堂……醫松田本生
……奇傑松波靜雄……村河與市左衛門……陸軍中將侍從武官長內山小次郎……湯本主
計總監……陸軍少將後藤常伴……陸軍少將岡田貫之……陸軍少將津川謙光……陸軍少
將山本登喜次……海軍少將梶川良吉……滿鐵理事藤田虎力……米原竹次郎……矢野喜
一……外交官杉村恒造……一等書記官澤田節藏……遞信省入本爲藏……內務省田賀奈
良吉……前大阪商業會議所副會頭法橋善作……三菱炭坑杉本惠……栗原廣太……小倉穀重……
……野々村政也……太田豊藏……伊藤義平……太田雪松……秋山忠直……林廣藏……覓
正太郎……神戸順三郎……男爵北垣國道……山陰鐵道建設計畫功勞者石谷董九郎……
市制功勞田中政春……公共吉村德平……遠藤薫……育兒院尾崎信太郎……篤志藤本重
郎……長谷川熊藏……佐伯元吉……藍綬褒章受賞者岩本廉藏……仝上村田吉重……
……老農垣田兵四郎……政治方面西谷金藏……濱本義顯……大谷誠夫……林業石谷傳四
郎……鑛山業木村久太郎……新聞記者加藤房藏……宗教家北尾日大……須和文孝……
……前東本願寺務總長龍經丸……英文學者武信由太郎……簿記學者木村勝藏……書家牧野芝石……
……刀匠日置兼次……（次第不同）

●內外圖書雜誌
●文房具運動具
●器械標本販賣
平木久松堂
鳥取市東町

書籍文房具商
鳥取市大工町頭
靜觀堂書店

因伯立志人物

前文部大臣 法學博士 奥田義人

政治家として本縣出身者中第一流の人物はといへば、先づ指を奥田義人に屈するでわりませう。義人は舊藩士奥田鉄藏の三男で、其生れたのは萬延元年六月十四日、鳥取市の翠綠したゝる愛宕山の下湯所町であつたのです。夙に刻苦勉勵して學を修め、進んで東京法科大學に入り、抜群の成績を以て明治十七年に卒業して法學士の稱號を受け、早くも太政官御用掛の役に取り立てられました。

義人は、當時政治法律の學がまだ開けて居ないのを憾みとして、大いに此の學の普及發達を計らんが爲めに高橋一勝等と共に、英吉利法律學校と云ふをの創立しました。この學校は、今は東京法學院と改名されて居ます。

其後義人は鳥取市並に横濱市から共に衆議院議員に選出しやうとしましたが鳥取市から選出されて衆議院議員になつた事が二回でありました。此外官歴の方から云へば、農商務參事官、農商務大臣秘書官、特許局

長、行政裁判所評定官、内閣官報局長、内閣書記官、衆議院書記官長、拓殖務次官、農商務次官、等に歴任し、明治三十一年には歐羅巴に渡航し、各國を巡つて、細かに其情況を視察し、翌年歸朝すると間も無く文部次官に任せられ、次で文部總務長官、法制局長官に歴任しましたが、明治三十五年に至つて官職を辭し、大正二年に山本内閣が成立したとき文部大臣となりました。

是より先、樞密顧問官として召し出されて御信用が厚かつたのであります。又其法學博士の學位を得たのは明治三十六年であつたのです。

博士は少年時代を鳥取に送つたのでありますが、往時を回想して語つて云ふには

鳥取の洋學所。明治元年に鳥取に洋學を學ふ私塾が開かれてゐました。此頃は鳥取藩に於て大に外國の事に眼をつけてゐましたから英學、佛學の塾が開かれた譯です。其塾は一行寺を借りて行はれましたが明治三年には官立學校となりました。平井致道、遠藤董、岡田昇といふやうな人が入つてゐたのです。私も英學所で勉強しました。しかし其頃は學用品とてはなく洋燈すら地方にはなく角行燈にて勉強。漸く土器に燈心を二口にして夫れを角灯燈に入れ、向ふと此方と向ひ合つて讀書したのです。又今日の鉛筆ペンなどは、固より市中に賣つてゐませぬから、江戸から幸便にて取寄せ之を皆にて分ち一本の鉛筆を四つに切り四人にて使用するといふ有樣でありました。

此頃尚髪を結へり。この頃はまだ髪を結つてゐて散髪ではなかつた。斷髪をした初めは平井致道君であつたと思ふが、同君が景山先生に髪を切ることを相談すると、先生は「ならぬ。」との事であつた。しかし其後、先生は帽子を冠るには髪を切らねばならぬから、己むを得ず許すといふ事であつた。この洋學所を出た人の中では侍從武官長を仰せ付けられた陸軍中將内山小次郎氏、常陸丸で名譽の死を遂げられた須知中佐などがあります。明治四年の末

愛日小學校今は醇風校。小學校が出來ることになり、湯所町天德寺に愛日小學校といふが出來た。こゝの校長には遠藤董氏がなられたのである。學校といつても非度いもので　とても今日のものとは比較にならぬ。私はこれに少しの間通つた。

博士は少年時代を鳥取に送つたのでありますが、

面白かつた小鳥獵。私の少年時代には學校などは無論無かつた。また私は鳥取の城下に漢學の塾を開いて居られた宮崎先生の所へ通つた。教はる書物は云はずと知れた四書五經で先生の前にキチンと坐つて大きな聲で意味も分からない難かしい文句を讀み上げてゐるのであつた。時が時だけに擊劍の稽古もやつた。又これからの人間は外國語を知つて置かなければ駄目だといふので佛蘭西語をも習ひに行つた。しかし其當時一番面白かつたのは小鳥狩で、今の少年ならば鳥打帽を被り空氣銃くらゐ持つて出掛ける所だが、そんなものは夢にも見ることは出來ない時分であるから、其日の稽古が終ると飛ぶやうにして家に歸り、早速、鳥籠と竿を持つて裏の山へ出掛けるのである。山へ行つて小鳥が居さうなと思ふ所に目つけ、餌を蒔いて、そこへ判らぬやうに竿を置き、木蔭にかくれて小鳥の來るのを今や遲しと片唾を飲んで待つてゐる。ところへ小鳥が喜んでやつて來る、すると竿があるから引つ掛る。跳び出して小鳥を驚づかみにして鳥籠に入れて歸つて來るのである。

握り飯を腰にして旅行。それから愉快だつたのは握り飯を竹の皮に包んで腰にぶら下げ草鞋を穿いて久松山に登つたり、千代川に行つた事である。高い山の絶頂に登つて木の根に腰掛け繪のやうに見える日本海や村々を眺めながら食つた握飯の味や、暑い〳〵夏の日盛りに、チョロ〳〵流れる野川で掬つて飲

んだ冷たい清水の味は、今もつて忘れることは出來ぬ。實際旅行ほど面白いことはない。私は旅行が好きである。今でも時間さへあれば盛に出掛けてゐる。私は少年諸君にお勸めする。旅行は愉快だ。しかし其旅行は、所謂七寸の草鞋で山野を踏み破つて健康を養ひ、地理を探り歴史を究めるといふ樣な旅行である。贅澤な旅行は私は嫌ひだ。

十七歳の時出京。母が慈愛の手織の木綿絣に小倉の袴をつけて二三の愛讀書を手にして父母の膝下を辭し、飄然として久松山を後にして駒返坂の險しい道を踏み越えて上京したのは明治十年夏の初め若葉涼しき五月であつた。私が京都に入つた頃は何でも西南戰爭の最中で人心何となく騷がしく落付かなかつた。京都には暫時の間滯在したきりで、尾張名古屋に行くことゝした。

この頃青谷出身で山田末藏といふ人が名古屋英語學校の幹事をしてゐた。外に知已もなく、不知案内の土地であるから、早速、山田氏を訪ねて萬事の相談をした。山田氏は親切な人で、何くれとなく面倒を見て呉れた。兎に角、英語學校に入るがよからうとあつたので、入學試驗を受けて第二學年に入つた。入つて見ると程度が低くて何の役にも立たぬ。そこで再び京都に行つて英語學校に入つたが同樣に程度が低いので、京都を去つて神戸で八木元直太郎に相談すると「それでは東京で奮發するさ。」と云つて、但馬出身前文部大臣であつた久保田讓氏に紹介狀を認めてくれた。

神戸から便船で出帆して横濱に着港し東京の人となつたのは同年八月廿九日であつたと記憶する。即日、久保田氏に面會を請ふて自分の希望を語り、「大學豫備門に入學したいから御便宜を與へて下さるやう。」と賴み入る。久保田氏には「田舍の學校も卒業しないで豫備門に入學したいとは、餘りに無鐵砲な話である。そんな無理な骨折りはせぬがよい。其代り近々の中に東京府中學が出來るから、それまで待たぬか。」と理を盡して諭してくれる。けれども自分が斯うと決心したからには、矢も楯もたまらず、「やつて見て出來なければそれまでゞす。一旦志したことだから努力するだけ努力します」と剛情にも先輩の懇諭を斥けて入學願書を提出した。出願期日は頗る切迫してゐて私の上京した翌日即ち八月三十日であつた。願書を出してから試驗當日まで半月餘の餘裕があつたやうに覺えてゐるが、其間は一所懸命に勉強し、殆ど晝夜兼行で準備した。試驗に應じて見ると案じるより産むが易いとの譬のやうに、いよ〳〵成績發表となつて自分の名が出てゐる、しかも及第者の過半數のズット上の方に列んでゐるではないか、自分ながら案外な結果に驚かざるを得なかつた。

入學してさて苦しんだ。案外な成績に及第したが嬉しく護持院ヶ原なる大學豫備門に通學する身となつた。豫備門に入學したはよいとして講義の解らぬには閉口した。教師といふは外國人許りで、歴史にまれ、地理にまれ、動植物學にまれ、何の科も何の科も所謂南蠻の英語で説明される、聽き慣れない耳には馬の耳に念佛とやら、何のことやら分らぬ、難解とも難題とも此上がない。教科書といつても無論英語の原書ばかりだから、ます〳〵分らない。六ケ敷いとも何とも言語同斷であつた。けれども難かしいでは濟して居られず亦負け嫌ひな自分であるから、字引と首引で勉強し學科の研究に心血を注いで、どうかかうか人並にやれるやうになつた迄はよけれど、お蔭で神經衰弱症にかゝり一學期間休んで靜養しなければならないハメになつた。

下宿料たつた參圓。このごろにゐた下宿は麹町區であつたが驚く勿れ、下宿料はたつた參圓、それで賄料も部屋代も油代も湯錢もこもつてゐる。一番の御馳走が蕎麥に鹽煎餅である、洋食などゝいふものは書生の口に入るものではないとしてゐた。所謂下宿の二階の四疊半に三人も四人も集まつて、人物論や

政治論をやる。興に入ると袖をまくり腕を撫して、口角泡を飛はせて痛論をやつて、自ら燕趙悲歌の士をもつて任じてゐた。併し論終れば、忽ち和氣藹藹、澁茶をすゝつて煎餅を嚙つた。

富の問題。氏が大學豫備門にゐた時の事である。金子賢太郎が教師であつて經濟學の教授の受持であつた。ところが生徒の方で大に不平があつて何でも先生を呵めてやらうといふ評議をはじめ出した。すると其委員として奥田氏と江木衷氏（法學博士）とが選ばれた。大變な委員だ、そこで奥田氏は、早速、圖書館へ出掛けて「富」といふ事で一所懸命と參考して豊富な智識を得て、さて教場で「富」といふ事で質問し初めた。先生大弱りであつた。それで生徒の方で此問題の解釋を與へた。金子先生は眼病だといつて辭表を提出したとやら、學生時代の逸話である。

伊藤公に用ひらる。博士が大學を出たのは明治十七年七月十日である。まだ前途の方針は定まつてゐない。此頃、獨逸から歸つて來て非常に人望のある伊藤公に賴りたいと思つてまづ大學入監の松田道之氏を訪ふて「私は伊藤公に會つて見たいが、貴下は知り合ひの緣故で私を紹介しては下さるまいか。」といふと松田氏は早速添書を書いて與へた。そこで永田町の官邸を訪ねた、同月の廿六日である。「公は未だお寢みだから少々待つて下さい。」と玄關の横の控室に案内された。控室に入つて見ると客が一人ある。白髯が茫々と生えた老人である。此老人と相對して一時間ほど無言のまゝであつた。暫くして應接間に案内された。初對面の挨拶がすむと率直な青年は「私は學校を卒業したばかりで未熟のものですが貴下に使はれたいのです、是非採用して下さい。」と云ひ出した。其側に之を聽いてゐた老人は徐ろに口を動かして「お前は奥田か、お父さんや貴兄さんはよく知つてゐるがお前のことは話に聞いてゐるばかりで初めて逢つた。」と温和な語。さて伊藤公に向つて「之は私の同郷の者で親友の子供だから是非引立つてやつて下だい。」と丁寧に依賴した。この老人は誰あらう、前京都府知事男爵北垣國道氏であつた。博士は其翌日から太政官調度調査局に出仕する事となつた。後、公の幕下に在つて憲法創定の際にも盡力し、宮中の御信任も加はり皇室令整理委員となつた事もある。

情誼に厚き人。博士は情誼に厚い人で縣下の人で學校の世話になり、周旋を受けた人は至つて多い。第四十聯隊設置の時、鐵道敷設の際も一方ならず盡力し、鳥取市に對しても出來得る限り利使を計つてゐる。舊師を忘れず。鳥取の私塾では宮崎貞藏氏の所で漢學の勉强をしてゐたのであつたが十數年前宮崎氏が上京の際博士は其旅館を訪ねた。此時のことを博士は語つて「このとき私は四十位で子供の三四人もあつたが宮崎氏は予に向つて大きくなられたがヨー。と一言申された。これは慥かに薫陶を受けたお蔭で四十にもなるものに斯う云ふ者は舊師より外にはない。」と。其後宮崎氏死去の節は香花を供して厚く靈魂を慰めたのであつた。

再版

壯烈二十士

著書 ●民法親族法論 ●民法相續法論 ●民法講義 ●法學通論 ●英米私犯法論綱

前鳥取中學鈴木先生著

代拾參錢 送料貳錢

●發行 鳥取市大工町筋 横山書店 振替大阪四二六八番

●賣捌 鳥取縣各書肆

二十士の事蹟たるや其干渉する所廣く、動もすれば累を現存の鄕人に及ぼすの嫌あるを以て人々口を噤じて言はず、二十士ありて因伯武士の眞髓を世に知らしめたり彼等が大活動の時を距る四十年の今日、鄕人猶其精神を追懷す死生の巷に出沒し公明なる其精神熱烈なる其行動は日本的事蹟として誇るに足るべく青年をして感奮興起せしむ奥田前文部大臣の叔父も又此一人なり

發明家　松本元泰

幼時。松本元泰は西伯郡米子町附近なる後藤村に生れ、三四歳の頃から醫者の眞似ばかりして遊んで居ました。其の頃米子町大字内町に、松本玄圭と云ふ醫者があつて、元泰方と始終往來して居ましたが　豫て元泰の子柄に惚れ込み　自分に丁度子の無い所から遂に元泰を所望して養子に貰ひ受けました。そこで、元泰は日々醫業を見習つて居ましたが　七歳の時に「自分は今頃の醫者の樣に病人を癒す醫者になりたく無い」と子供に似氣無く申したので　兩親は大に不審を懷き「何故であるか」と尋ねたのに、「自分は世の中の人が病氣に罹らないやうにする醫者になりたうございます」と答へたさうです。兩親も此の言に動かされて、その年の五月に父は元泰を連れて大阪に行つて知人の所で醫者の修業をさすことにしました。

醫術成功。元泰は、大阪に留ること十年　十七歳の時に至つて更に京都に行き朝廷の侍醫を勤めて居る某に就いて學び傍ら賴山陽の門人となつて修業すること五年に及びました。此際丁度山陽が日本外史の編纂中であつたので、元泰も一年間その助力をしたと云ふことであります。

二十七歳の時に、廣く天下の名士を訪ねて智識を磨かうと、長崎に行つたのに、其の德望と技術を慕うて九州諸侯から御殿醫に召し抱へたいと所望にあづかりました。併し元泰は「我れ若し大名の所望に應ずれば一侯一藩の醫者たるに止まり廣く天下の醫者たることが出來ない。我が目的は天下の醫者として廣く天下の人を救ふにある」と何れも辭はつてしまひました。そこで我が業を開くは交通便利の地が宜しいと云ふので大阪に行つて開業し、「養生論」と云ふ書を著して個人衛生、公衆衛生の必要を說き、又「折衷醫道」と云ふ書を著して蘭漢兩醫の折衷を說き、或は自ら深呼吸、体操、冷水摩擦などを實行し、人にもこれを勸めなどして名醫の名を世に傳へられました。

軍備說の主張。時は天保弘化の頃、德川幕府も漸く衰運に傾いて、政は亂れ、外國軍艦來つて太平の眠を醒し、人心穩かならぬ時節となりました。こゝに於て、元泰大に奮ひ立ち「自分はこれ迄人の病氣を救うて來たが、今は我が日本國が大病である、何を捨て置いても先づこの大病を治療せねばならぬ」と云つて盛に志士と交はり軍備說を主張して屢々策を幕府に進めました。

又、軍艦を擊ち破る要具として今の魚形水雷樣のものを發明し、或は海防の急務を叫んで全國の要地に臺場を築くべきことを主張し、米を蓄へ置くことの必要を說き、軍備に關する書を著して大に世人に警戒を與へましたが、その說は追々實行せられて着々効を奏するに至つたのであります。

種痘の傳播。元泰は、大阪に除痘館と云ふのを開いて盛に種痘を廣めて居ましたが、安政五年に數名の弟子を連れて鳥取に來て、大工町入美屋旅館に滯在し、醫師に對して種痘の方法を授け、又一般人民に對して自ら種痘を施し二箇月餘も同地に留つて居ました。これが我が縣下に種痘を傳播へた始めであります。それより故郷米子に歸つて種痘に盡力し　又弟子を境に遣つて此處にも之を傳播へました。當時は各地共に、非常に疱瘡が流行して居ましたから、元泰は當時に取つて實に救ひの神であつた

のです。

その後元泰は大阪の醫業を養子に讓り、六十八歳の時に再び鳥取に來て遂に池田侯に抱へられ三百石を食んで米子に住居することとなりました。

戰具の發明。　元泰は、年頃戰具の發明に志して居ましたが、種々苦心の末、遂に海上戰具たる敷設水雷を發明しました。依てこれが實驗を西伯郡三柳灘で行ひましたが、思はしく行かなかつたので其後一層の研究を重ねて、こんどは米子清洞寺灘に於て實驗を行ひ好結果を得ました。かくて元泰は、此の品貳個を製して藩侯に獻上しました。又陸上戰具として砲彈の中に毒藥を仕掛けて擊出す「ねむり玉」と云ふものを發明し、これまた藩侯に献上しました。

斯くて元泰は社會、國家のため諸種の貢献をなして、一日も怠ることがありませんでしたが、明治十六年四月三日行年九十三歳を以て遂に永き眠りに就いたのであります。其の墓は米子寺町法藏寺内にあります

元東京府知事　松田道之

松田道之は舊鳥取藩士鵜殿藤輔の家來なる久保太左衛門の子で、幼名を伊三郎と云ひました。幼ない時に、藩醫木下主計方の若黨奉公をして居たことがありましたが、實家は何分にも陪臣の事故、衣服其の他とても、充分の手當が出來ぬから自然道之の裝束の汚穢いのを見て、同年輩の小侍等は、これを嘲り笑ひますけれども、道之は、少しもこれを意とせずして、日夜勉勵しますので、木下も感心して、天晴末頼母しき少年哉と　取り分けあはれみを掛けて居ました。

處が、爰に、同じ鵜殿の家來で、松田市太夫と云ふ人がありました。久保とは平常親しい中で、親族のやうに往來して居ましたから、道之もまた、市太夫を大人樣々々と慕ひ廻り、木下より宿下りをする時には、必らず一夕は松田の家に宿るやうにして居ましたが、この市太夫には嗣子がありませんので、道之を養子に貰ひ受けようと、久保方へ申込みました。然るに、丁度同時に木下の親戚に當る高藤武左衛門と云ふ人が　豫て道之の英敏くして氣象の活潑なのを見込んで、是非養子にしたいと云ふので、木下を以て、これも久保方へ此旨申込んだのです。

高藤は、池田家の近臣で錄百五十石を領して居ますし、又、松田は久保と同樣の陪臣であるので、高々五人扶持の切米取りでありますから、道之の身に取つては、高藤家へ行つたなら、よほどの立身出世である譯です。

されば、道之の兩親は、「これは高藤家の養子にやるべきである。」と決心して、父は此の事を道之に告げました。時に道之は漸く十三歳の少年でありましたが、容を正して父に對つて「私は何事でも父上の仰せに背きは致しませんけれども、名を賣り、利に趨るは男子の快しとせぬことであります。今若し、高藤の養子となる時は『アレ見よ、久保太左衛門は、平常親しい中の松田よりの緣談を謝つて、身分の高い高藤へ養子に遣つたのは、利の爲め義理を忘れたものである』と一家中の嘲笑を受けるにきまつて居ます。それですから、若し父上が私を他家へ遣らうと云ふ御所存でありますならば何卒高藤の方を辭り松田の方へ遣つて下さるやうに御願致します。」と、理を分けて申しましたので、父も其の理に服して、遂に松田方の養子に遣はしました。これ

よりして道之の譽は高くなり、「松田の奇童」と呼ばるゝに至りました。

其の後、道之は、豊後に行つて、廣瀬淡窓と云ふ儒者に就いて學問を勵んで居る内に　幕府は、長州征伐の軍を起して、鳥取藩にも「應援の兵を出せよ。」と命じましたが、藩の元老たちは「如何したものか。」と大いに迷うて居ました。道之は、これを傳へ聞いて急ぎ歸つて、主人鵜殿に面會して妙計を進めた爲めに遂に藩論が定まつたのです。これより道之の名望は益々高くなつて遂に藩主の耳にも入り、鵜殿へ沙汰があつて　直參の臣にしようと云ふことを傳へられたけれども　道之は思ふ旨があつて、固くこれを辭りました。

後、道之は伯州米子に於て石州津和野の藩士、來栖新之助と云ふ一少年のために力を添へて親の仇たる三人のものを討たせたことがあります。又、慶應二年に京都に出て、勤王家と交はつて密かに討幕の謀をめぐらしましたが、維新となつては、徵士に擧げられて、内國事務局の權判事に任ぜられ、次で京都府判事となりましたが　其の裁判振りが誠に公平で且つ老巧であるので、府民は、昔の名奉行大岡越前守になぞらへ、今大岡樣と稱へて敬慕して居たさうです。

其の後、明治四年に至つて大津縣令に榮轉し日本三縣令の一人として其の名を知られました。されば、大いに政府の信任を得て、明治八年には内務大丞に任ぜられ戸籍頭を兼ね　同十年には更に内務大書記官となり、太政官大書記官を兼任し、同十二年には東京府知事となり、專ら府民のために幸福の增進を計り、或は東京灣の築港工事、或は中央市區の制定、或は防火線の策など大いに力を盡しましたが、十五年六月の頃より胃癌の病にかゝり、容易ならぬ重体となりました。

この事早くも天聞に達し、畏くも　陛下には、直樣侍醫池田謙齋を御召しになつて「道之は朕が良臣である。汝往つて治療を施こせよ。」との勅が下りましたので、謙齋は其の診察治療に心を盡したけれども、其の甲斐無く同年七月行年四十四歲にして遂に逝去なつたのは、誠に悼むべく惜むべきことでありました。

逸話。道之は頗る開明主義の人で、曾て近江縣令時代に、庶民の忌み嫌ふ穢多を五六名も玄關番に使ひ世の人をアッと驚かしたと云ふ話があります。

前彈正臺大忠　故教部大亟　門脇重綾

門脇重綾は西伯郡淺村の人で神官であつたのであります。其有名なのは德川幕府の末　勤王の大義を唱へて京師並に江戸の間を奔走して、諸藩の志士と交り、明治維新の大業も成立つ樣に、種々と盡力したからであります。

重綾は幼少の時から國學に志して、晝夜勉强して少しも倦むことを知らない。母は賢い人で、何時も重綾を勵まして勉强させてゐましたが、其勉强が過ぎたと見えて二十歲の頃に重綾は病氣にかゝりました。母は此樣を見て「あまり勉强に凝つたものだから、病氣になつたであらう。」と思つて、それから後はあまり學問をすゝめませんでした。しかし重綾の勉强は少しも變りません、表面は母を安心させる爲めに學問を廢めたやうにしてゐましたが、内心は何時も學問の方へ向つてゐましたから、年を經につれて、だんゞゝ其道に達し、國學及歌道は大に進みました。そこで、日本書紀集傳、垂統大義などいふ書物を著述し、又、

名和長年公の事蹟が世に明かになつてゐないのを思へて、百方に其事蹟を調査べて名和氏記事といふ書物を編みました。

重綾はます〳〵國學に精通しましたが、此時の藩主池田慶德公は、之を聞かれて召し出して藩士とし萬延元年藩の學校であつた尙德舘の國學の先生となされました。此間重綾は熱心に子弟の敎育につとめたのであります。

元治元年となつて、藩主は重綾を周旋方兼記錄方といふに擧げ用ひられた。その職務は今の外交官である。京都にゐて　天朝並に幕府に伺候ひ、又諸藩の志士と交際して、時の形勢を藩主に申告するのである。重綾は京都にゐる間、勤王の士と交つて國事に奔走した爲め、幕府からは嫌疑をかけられて捕へられやうとした。幕府に捕へられては大變であるから幕吏の目を掠める爲め一時、京都の東に潛伏て、少造と名をかへてゐた。重綾は米子の村河與一右衞門と氣脈を通じて勤王の事に盡したのであるから、潛伏てゐる時にも始終書翰の送答をしてゐた。

重綾は京にゐて近衞忠熙公に謁して勤王の赤誠を陳べ、又一方では薩摩の大久保市藏、土佐の阪本龍馬等と會つて薩長の合同をはかり、又廣島に急行して時の閣老に見へ幕府が長州征伐の師を發してゐるのは不可と建議するなど、時局の問題に努めた。

此時、幕府では家茂薨じ、一橋慶喜が入つて將軍となり、天下はます〳〵騷がしくなつた。ある時京都にゐる各藩の志士が、聖護院に集まつて時勢を論じた。この席で某藩の士はしきりに幕府の政治を稱揚て、幕府の功績を數へ立て一橋慶喜に軍職を授かる樣に朝廷に奏問やうと連署の議を出した。之を聞いた重綾は、大層怒つて「何者だッ。今日にあたつて幕府を佐ける議を立てるものは、今は政權を朝廷に還る大事な時機だ。まだ幕府に詔ふ議論を唱へるか。」と、滿座にひゞく大音聲で叱りつけた。一座のものは愕いて色を失つたが、重綾の云ふ所が道理であるから皆これに贊成して、朝廷に請ふ議は破れた。

それから後、幕府は大政返上といふことになつて、明治維新の大業が行はれたのであります。明治元年の春、徵士となり內國事務局權判事となり、尋で辨官事に任せられ從五位に叙せられ爾來、彈正大忠、神祇少輔、敎部大丞等となり、正五位にすゝみ明治五年八月歿す、享年四十七歲。朝廷からは特旨を以て金五百圓を下されました。明治二年の頃、廢藩置縣のため種々盡力しましたが、どう〳〵諸藩の版籍奉還が實行されました、此の時重綾は所感の和歌を詠みました。

地ならば大君ますと谷蟆のしりて幾世かまちわたりけむ

其の誠心は感心であります。重綾は平生多言せず沈默を守つてゐましたが、親しんで見れば溫情を持つてゐる人でありました。議論などになれば雄辯滔々として流るゝやうでありましたから人は不思議に思ふ位でした。十二歲の時父を失つて母の膝下にあつたのですが、よく母に仕へて孝、其母が病氣であつた時などは最も看護に努めて寢食を忘れる程でありました。

明治元年正月、山陰道鎭撫使、今の侯爵西園寺公望は、錦旗を守護し薩長の兵を率ひて、全道各藩の鎭撫に盡されました時、重綾は、藩侯より鎭撫使の隨行を命ぜられました。此の時、松江藩は未だ恭順の實効が立ちませんので、鎭撫使より嚴命の詰問條件を發せられ、松江藩にては首席の家老大橋筑後といふ人が切腹して鎭撫使に申譯をせねばならぬことになつてゐました。此の時の事で語つて置く事があります。大橋筑後は國境なる木佐村に於てすでに切腹と決めましたから、刀を以て腹を切らうとしてゐる。此時、重

綾は「まてッ。」と一聲かけました、列座の人は愕いた。重綾は徐かに鎮撫使に乞ふて大橋は此藩の名門であります、それに松江藩は、もはや恭順と意を決してゐる所でありますから、大橋を死なして了ふにも及びますまい、其罪を宥して大に朝廷の爲めに竭させやうではありませぬかと申しました。西園寺鎮撫使も之を聽いて大橋を宥すことゝ致しました。重綾は斯樣な時にも人を惜んだのであります。感ずべき心掛ではありませんか。また其の息重雄は、明治二年凶荒の爲困窮せる自村及近村の貧民貳百餘戸に、金米を救與しました。壯年の頃より地方のため、公共の事に盡し、亦三度衆議院議員に當選しました。目下鳥取縣農工銀行頭取の職にありて金融界に活動して居ながら、歌道を其の父に學び、常に閑日月を樂しんで居る人であります。

天臺宗座主　不二門智光

不二門智光は天保十二年に生れ本年七十八歳の高齢でありますが、幼少の時に鳥取市立川町四丁目なる大雲院と云ふ寺の弟子となり、其の後修業のため京都に出て苦學を積んで遂に明治五年比叡山延暦寺内の蓮華院と云ふ寺の住職となり、更に明治九年に大雲院の住職に轉じ、爾來引續き同寺に務めて居ましたが、明治四十五年五月を以て名譽ある天臺宗座主と云ふ榮職に任ぜられたのであります。此の天臺宗座主と云ふのは、天臺宗の主宰であつて、一宗の一番高い身分です。斯かる名僧を我が縣下から出したのは實に縣下の名譽として誇るべきであります。

晋山式の光景。智光はいよ〳〵天臺座主に任ぜられたので、九月二日に鳥取市を出發し、同五日に天臺宗本山なる比叡山延暦寺に到着ました。同所では、天臺宗大學中學校生徒數百名は總門前に、一山の寺院僧侶は勅使門前に、宗務廳役僧は本坊玄關に整列してこれを出迎へました。智光は、本山より鳥取市迄出迎へて居た獅子王圓純の先導で先づ本坊内佛殿に昇つて嚴かに晋山の式を執行ひ、それより對面の間に於て各門跡、本山寺務役僧、其の他全國各教區代表者などに一々就任の挨拶をして式を閉ぢ、次に鄭重なる披露の饗應がありました。この日の來賓は、梅谷三千門跡、三津粟出青蓮院門跡、伊藤日吉神社宮司などを始めとして、凡そ三百餘名であつたのです。

性行。智光は謙讓で沈默寡言で、至つて品行の堅い人であります。そして明治九年に大雲院住職となつて以來、或は佛教同盟會長として、或は積善院長として、近くは盲啞學校創立主唱者として道德慈善の事業に盡したことが前後三十餘年に及んで居ます。かやうに德風の高い高僧でありますから、此の度の榮職を得たのは決して偶然のことで無いのであります。

逸話。茲に白蓮會と云つて、智光が明治の初年から組織して居る講中がありますが、それは、一人が壹錢宛賽錢を持參して說教を聞くのです。それが現今は講中が減つて五六人となつて居るが、最初は邦々の講中であつたので、塵も積れば山のたとへ、壹錢宛の賽錢が積り積つて田地の一町歩許りと正金の四五百圓もあると云ふことです。

大日本郵船株式會社副社長　加藤正義

加藤正義は安政元年二月を以て日野郡根雨在なる別所村の一農家に生れました、子供の時には、根雨

の大庄屋役場にしばらく勤めて居ましたが、明治四年十六歳の時に鳥取藩、民政局に出仕して始めて官吏の仲間に入り六年十一月置賜縣屬に轉任して判任官に昇り數年間勤務怠りなく、事務勉勵のために屢々褒賞を受けました。次で山形縣屬に轉じ、間も無く兵庫縣に轉じました。この兵庫縣こそは實に正義の爲めに立身出世の門戸であつたのです、即ち同縣勤務中に當つて、武井某（前の鳥取縣知事武井守正の兄）に信用せられ、其の盡力が端緒となつて頻りに昇進し、十八年六月には兵庫縣屬よりして一足飛びに農商務權少書記官に任ぜられ世の人を驚かせましたが、同年九月には、時の農商務卿の命を受けて、日本郵船株式會社創立の事に從事し、二十二年四月には同會社の理事に任ぜられ、二十八年に至つて其の副社長の榮職を占め、二十八年十二月、日清戰役の功により勳四等に、三十五年清國事變の功により勳三等に、三十九年日露事件の功により勳二等に叙せられ、同年歐米及び印度を漫遊して翌年歸朝し、今尚は引續き日本郵船株式會社副社長の任にあるのです。子正治は現に東京帝國大學法科教授法學博士の名譽ある身分となつて居ます。

立志の動機。

正義の立志の動機として同人は左の如く話して居ます。

私の十二歳の時であつたと思ふ。私は根雨の近藤喜兵衛方にあつた大庄屋役場に勤めて居つた際であるが、何人でも俗に言ふ饑饉年の後で、役人が實地檢分に來るに就て隣村と答申の仕方が違つては不都合であると云ふので、私に溝口の大庄屋野坂方へ打合せの爲めに出張せよと云ふ命令が下つた。と云ふ譯は、私は一躰少さい時分から小理屈を列べて鼻柱が強かつた所へ、間違つた所で小供の言であるからと云つて取消も出來るが、其處が大人の使になると取消が出來ないと云ふ理由から斯く大命が私に下つた譯である。

折柄大雨が非常に降つて來て、溝口の大庄屋野坂方へ着いた時分には、ビッショリ濕れてしまつた。やがて狀差を取り出して列び居る大庄屋の手代に渡した。すると手代は其れを隣室の主人の所へ持つて行き、源太郎（私の幼名）が來た旨を取り次ぐや、「またあの小僧が來たか」と叫んだ主人の聲が障子越しに私の耳を衝いたのである。私は此の叫び聲を聞いて小供心にも頗る不快の念を起した。かくて二時間ばかりも板の間に待たされた。日はズップリ暮れる、着物は雨にビショ濕れに濕れて寒さを覺える。さきには「またあの小僧が」と辱かしめられ、今は二時間も板の間に待たせられる。考へれば考へる程殘念だ。「今に見よ、偉い人になつて汝野坂の頭を押へて遣らう」と云ふ決心が端なくも胸中に湧き起つたのである。これが抑々私の發憤立志の動機である。

逸話。

正義の少年時代の逸話として同人は、左の如く話して居ます。この逸話によつて正義が小供の時から機智に富み且つ度胸のたしかであつたことを伺ひ知ることが出來ます。

私の十四歳の時であつたらう。或る重大な要件で、根雨の大庄屋役場から隣村の溝口の大庄屋役場まで派遣せられた。根雨から溝口までは、田舍道五十丁と云つて居るが其の實は二里もあつたらう。曲り曲つた道で、其の時分は極めて寂しい場所であつた。

斯くて、道中半分も來たと思ふ時分には、日はもう、薄暗くなつて來た。見下せば千丈の絶壁の下には急流が岩に激して流れて居る。人の子一人も通らない。山道の獨り道中のことであるから其れは〳〵氣味が惡るかつた。すると、突然、雲衝くばかりの大男が行手にヌッと現はれた。道路が曲つて居るから眼前に現はるゝ迄は知れなかつたのである。見つむれば深編笠を眼深にかぶつて二本の大小を腰に差し

たる一人の武士であつた。やがて、武士は前後を見すまして、突然私に向つて、「小僧待て」と叫び、更に、獨り旅であるか、それとも連れがあるかどうかを尋ねた。私は、小供心にも此奴は屹度惡徒に相違ないと睨んだから、わざと落ち附き拂つて「連れはあるのだが、一足遲れて直ぐ後から來るのだ。」と詐つて見た。すると其の野武士は忽ち私に迫つて來て、「有り金を殘らず差出せばよし、それでなければ、これだぞ」と刀に手をかけておどしかけたのである。

私はこの時膠に一本脇差を差して居つたが、何樣小供の事であるから、正面には到底敵し兼ねるので、咄嗟の間にこれは機智を以て欺くべしと決心し、一層落ち着き拂つて、扨「連れの男に財布を預けて置いたので、今は持ち合せが無い」と答へた。すると、野武士は、「さうか」と言ひ捨てゝ私が指した方へ駈けて行つた。その暇に、私は一生懸命に溝口の方へ走つて、危き難義を逃れたのである。

正義が去明治二十二年に鄕里に歸つた時には直ちに我が家に入らずして、恩人の豪家近藤喜八郎の宅を宿とし、そして親兄弟親戚知己などを招いて對面したのに、一坐のものは誰一人として仰ぎ見るものが無かつた。又、土地の人等は「源太郎さんは、大層出精したさうじや、月給の百圓も貰ふと云ふでは無いか、剛氣に出かしたものじや、ホンに彼の人は大閥樣の生れ變りだらう」などと言ひはやしたと云ふことです。實に日野の山間から斯くの如き人物を出したのは、誰しも思ひ寄らないことであつたのです。

因伯珍談

拾參錢
送代四錢

古來より縣下には夥しき傳說口碑あり淸新なるもの二十話を選む談笑の間に少年諸君を稗益する所少なからず父兄諸卿が子弟敎訓の資料にもなりぬべし冬の夜長爐邊の團欒夏の樹蔭夕風涼しき處に此の一冊を携へ和樂に供せられよ。

發行　鳥取市大工町筋横山書店　發賣　鳥取縣各書林

京都大學病院長
醫學博士　伊藤隼三

伊藤隼三。は舊鳥取藩士親孝行者で評判のあつた小林純藏の三男で、元治元年五月に生れました。少年の時に鳥取市本町なる伊藤病院の藥局に通勤して居ましたが、性質が至つて素直で行末見所のあるところから、院長伊藤健藏に見込まれて、遂に其の婿養子となりました。

隼三は、東京帝國大學を卒業し、醫學士の稱號を得て歸鄕し、養父の後を繼いで病院長となり、次で札幌病院長となり、外科の術に巧であると云ふので名を得て居ました。曾て或る難治の病者が治療に參りましたが、隼三は口を以て病者の腫物の毒汁を吸ひ取つて、遂にこれを全治させて人々を驚ろかせたと云ふ話があります。

明治二十九年醫學研究のため歐米に留學し、二年の後に、歸朝して再び札幌病院長となり、三十三年に醫學博士の學位を授けられ、同年七月に京都帝國大學醫科大學敎授となり、同大學病院長を兼ね、今尙ほ引續き其の職にあつて名聲を現はして居ます。

隼三は年に一度は墓參のために鄕里鳥取に歸るを例として居ます。その節には廣く病人を診察します。それで因幡は勿論のこと但馬や伯耆から來るものが非常に多く伊藤病院の門前は人を以て埋めらるゝ程だと云ふことです。

移民事業　新　金　治

獨立獨行。自給自活、苦學力行して成功した新金治は鳥取縣人であつて、元治元年十一月に生れた。九歲の時から英學の修業をはじめ次で佛蘭西語を研究し、明治十四年鳥取縣中學校を卒業して上京し、大學豫備門に入り法科大學に入つたのであります。所が十九年に至つて、父は不時の災難に遇ふて悉く家產を消費したので、一厘の學資すらも得ることが出來ぬ樣になつた。しかし斯樣な事で、志を挫く人ではなかつた。自ら學資をつくつて勉强せねばならぬと、職を求めて漸く明治日報社の飜譯係となりました。「ヤレ嬉しや。」と思ふ間もなく、二度目の不

幸は、同社の廢業となつて現はれ再び學資を得る途が斷ゐました。働くことは厭はぬのであるが働く業務を見出すことが困難い。己むを得ぬので、大學を辭めて某私立學校の英語教師となり、僅の餘暇を以て孜々として勉强したのであります。

金治はつら〳〵世間の有樣を見、自分の境遇を考へて見れば、何時までも斯うしては居られぬ。そこで蹶然海外に踏み出さうと、明治二十八年三月加奈陀に渡りました。加奈陀に渡つてからは、あらゆる辛苦と艱難とを冒して奮鬪努力し、少しも屈せず、自分の運命の開拓に從事したのであります。卽ち、日本水產會社と謀つて米國鮭を日本に輸入する事を初めましたが、非常な好結果を得ました。加奈陀に於ける事業はまだ前途有望でありましたが、故あつて日本に歸つて來ました。歸つて來ると、東洋移民會社から移民監督の事を托せられましたので、これに從事し、三十一年七月今度は、濠州に渡航して、移民監督の傍ら製糖業の研究にかゝりました。此間、米國通信學校の講義によつて法學を修め其處の學位を得ました。

明治三十六年に至つて、製糖業の研究も、やゝ終局を告げましたから、更に大に實業界の爲めに盡す所あらんとして歸朝したのであります。今は潛心其計畫中であります。氏の如きは實に獨力獨行の人といふべきであります。

法學博士　貴族院議員　桑田熊藏

桑田熊藏は東伯郡倉吉町の人で、多額納稅者であります。明治元年十一月を以て前代藤十郎の長男に生れました。議論を好んで居ましたが、早くも志を立てゝ上京し、明治二十六年に帝國大學政治科を卒業し、同二十九年には、英吉利、佛蘭西、獨逸を遊學し、三年の後歸朝して社會政策學會なるものを起し、同三十七年に「生糸工業と社會問題」と云ふ論文を提出して、法學博士の學位を授かり、同年、貴族院議員に選擧せられ、次て四十四年の改選に當つて再び貴族院議員となりました。熊藏は、社會政策大家として其の名を知られて居るのであります。熊藏には二人の弟がありますが、共に帝國大學を卒業して居ます。

著書　●歐州勞働問題ノ大勢　●工場經濟論
●工場法ト勞働保險

●金言（德川光圀）

一、苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし。
一、主人と親は無理なるものと思へ。下人は足らはぬものと知るべし。
一、子ほどに親を思へ。子なき身は他を見て手本とすべし。
一、掟にふぢよ。火にふぢよ。智惠なきものに恐るべし。
一、慾と色とはかたきと知るべし。
一、小なる事に分別せよ。大なる事におどろくべからず。
一、九分は足らず、十分は溢るゝと知るべし。
一、分別は堪忍にあるべし。

新領土に發展せる兒島幸吉

兒島幸吉は　安政四年十一月に鳥取市瓦町の一商家に産聲を擧げました。何分にも舊藩時代に於て、商家に育つたのであるから、さしたる教育は受けて居ませんけれども、心が至つて敏く、物事に綿密で早くから、なか〳〵商才に富んで居たのです。十九の歳に家督を繼ぎましたが、これ迄の家業である染一業を廢し、新たに酒造業を起して、一心に業務の發達改善を圖り、原料を選んで、引續き其の釀造に力を盡してゐます。

明治十三年頃から、しばらく運送業をも營んで居ましたが、二十一年に至つて鳥取精穀合資會社を創立して、器械精米の業を始めました。後に至つて、此の會社を自分の一手に買入れて、精穀の外、製材の業をも始めて、今尚盛に營んで居ます。

又、曾て鳥取酒造合資會社も創めました。鳥取汽船株式會社も設けました。鳥取倉庫株式會社も組立てましたが、鳥取汽船株式會社と、鳥取倉庫株式會社とは、後に至つて解散し、近頃又、鳥取市並に其の近郡の資産家と謀つて、鳥取倉庫株式會社を組織して、現に其の取締役を務めて居ます。

幸吉は亦新領土に向つて、大いに發展して居ます。即ち明治二十八年に臺灣に渡り、臺北に於て用達及び物品販賣業を開き、且つ日本家屋を建築して貸家とし、漸次繁盛に赴いて今日に至つて居ます。又、明治三十八年、日露戰爭の終に當つて滿州に渡り、委しく同地の商業を視察し、後、大連と旅順に支店を設けて米穀酒類醬油砂糖などの卸賣業を始め、或はラムネ、シヤンペンサイダーの製造業をおこし、或は冷藏庫を設け、製氷業を開き或は貸家を建築して盛に活動して居ます。

幸吉は、斯樣に多くの業務を營んで地方商業の發展を計り、新領土の開拓につとめて國家公共の福利を進むるために殆んど寢食を忘るゝ程の熱心を以て奮勵して居るのです。

商業上に於ける訓誡　幸吉は「人の立身出世をする上に於て商業程天地の廣いものは無い。別けて我が新領土に向つて商業の道を開くのが最も有望であつて且つそれが今日の急務である。」と云ふ意見で、世の商業に志すものに對して左の訓誡を與へて居ます。

一體商業は危險か多いもので、動もすれば失敗する。そして海外に於ける營業は、殊に困難か多いから、精力と忍耐とに富んで辛苦に堪へるものでなければ成功かむづかしい。如何に腕前かあり資本かあつても、それのみに依賴することは出來ないのである。

又、商業上有望なものは我か新領土である。併し新領土に營業するものは、必ず「其の根據を內地に置く」と云ふことが「基礎を固くする」と云ふ上から最も必要の事であらうと思ふ。

處生上の主義　幸吉は、勤儉質素を旨として、敢て名譽を求めず、政治に手出しをすること無く、一心に商業に從事し、これを以て身を立て家を興し且つ公共慈善の道に盡したい。と云ふのを主義として居ます。

幸吉は、かゝる主義の下に非常の苦心と熱誠とを以て、これに當りましたから、その事業は着々功を奏し、今や其の名は獨り縣下の實業家としてばかりては無く、全國中の名ある實業家の中に數へらるゝに至りました。去る四十二年三月、鳥取縣實業家十傑投票を行ふたのに、最高點を以て當選しました。又同年五月、東京同文館から發刊する「商業界臨時增刊新進實業家」と云ふ雜誌に迄も載せられたのであります。

兒島幸吉は斯樣にして成功しましたが、其少年の時の苦勞を思へば實に今昔の感があるだらうと思はれます。蕎麥の荷を擔つて賣り歩いたのも幸吉であります。清水を桶に入れて賣り歩いたのも幸吉であります。今は各地に工場を有して大發展をしてゐる。このやうな型が今日以後の人のとるべき道である。虚名を得て喜ぶやうな者は共に語るに足らぬ殊に鳥取縣のやうな官尊民卑風の舊思想ある地方に於て氏の如きは實に模範である。

侯爵池田仲博

（二六）

池田家は、因伯三十二萬五千石を領して中國屈指の大大名でありましたが、明治維新後、輝知の代に至つて華族に列し、侯爵を授けられました。當代仲博は舊十五代將軍德川慶喜の四男で明治十年八月に生れ、同二十三年五月、輝知の養嗣子となつて家督を相續されました。三十二年に陸軍歩兵少尉に任せられ近衛歩兵聯隊附となつて居られましたが、其の後病氣のために職務を退かれました。

侯は我が舊藩主の家を繼いで居らるゝとは云へ、其の一身上から見れば我が縣下と現在何等の關係が無いにも拘はらず、縣下の出身者を引立てらるることと、縣下の發達のために非常に盡力せらるることは、吾々の大いに感謝せねばならぬ次第であります。

男爵名和長憲

名和家は彼の南朝の忠臣名和長年の後裔であります。長年より十數代の後、顯興に至つて柳川藩に仕へて居ましたが、其の後數代を經て長恭の代となりました。長恭は明治十一年に名和神社の宮司となり、同十六年に華族に列せられ男爵を授けられました。長憲は其の子であります。

長憲は夙に軍事に志して明治二十八年には士官學校に入つて騎兵科を卒業し、其の後、段々進んで東宮武官、東宮御用掛の榮職を務め、三十七年には早くも陸軍大佐に昇進しました。日露戰役には、近衛騎兵聯隊長として出征し各地に戰つて勳功を立てたのであります。目下豫備陸軍少將であります。

熱心　龜井甚三郎

伯耆國倉吉町に、山陰製糸株式會社と云つて、なか〳〵宏大な會社があります、五拾萬圓の資本金と、四百人の工女とを有して盛に生糸製造の業を營んで居ます。此の會社が斯く發展するやうになつたのは、一に龜井甚三郎と云ふ人の熱心の結果であるのです。

甚三郎は、果斷豪毅のうまれつきで、事業家としては、最も適當の人物です。明治二十三年以來、專務として、最も熱心着實に同會社の發展につとめ、全國の模範工場に則つて設備を完全にし、繭の精選と糸質の吟味とに注意して、非常の苦心をかさねましたが、其の結果として同會社より出す生糸は、糸質至つてよく、本場なる信州、上州のものよりも優る位で扇印、櫻印、鎧印など色々ありますが、殊に鎧印は、殆んど天下一品で、横濱市場では、大層好評を博し、毎回各地の博覽會では、常に優等の成績を占めて居ると云ふことです。元來、生糸は我國産の第一位を占めて居るので、養

鬱製糸の事業は國家の發展上最も必要なる事業である。處で我縣下は、近來着々此の事業に向つて發展しつゝある。此の際に當つて、甚三郎の如き熱心なる事業家を出したのは、獨り我縣下の誇とすべきのみならず、實に國家のために賀すべき次第であります。

前明治大學校長 法學博士 岸本辰雄

法學を研究して一世に名高く、學校を起して人材を教育した岸本辰雄は、舊鳥取の藩士であります、嘉永五年の生れでありますが幼い時から才能が進んで衆に擢んでゝゐました、夙に和蘭式の軍法を學んで十五歳の時、藩令を奉じて京都に至り、多人數の指揮者となつてゐたと傳へます。維新の大變革が行はれて、時勢が變つて來た時、考へる所があつて東京に出で法學の研究にかゝりました、すなはち明治二年、大學南校、司法省法學校等で專心法學を勉強し明治九年に其業を卒へて法律學士の稱號を得ました。辰雄は非常な秀才でありましたから、直ちに佛國留學を命ぜられ巴里大學に於て、更に深く勉強して明治十三年に歸朝しました。

それから參事院議官補、法制局參事官、司法省參事官、大審院判事等となり、且、各種の法律編纂施行取調等の委員をはじめ新法典編纂の委員として日本法律の發達完成に貢獻した所が多大であります。

是よりさき、歸朝して我國の狀態を見ると、法律の思想は甚だ幼い、法律は人が社會的生活を遂げる上に一日も缺くべからざるものである、今此思想が養はれて居ぬのは殘念なことである、是非學校を起して教育せねばならぬと、同志の人と相談して明治十四年一月明治法律學校を設立したのであります。開校後は自ら其經營に任じて多數の學生を養成しました。

明治廿六年に至つて、大審院判事を辭めて辯護士となり、深い學識と手腕とを以て辯護の事に從ひました。明治法律學校は內外の信用が益加はりましたので明治三十六年更に改革して大學組織として明治大學と唱へ、多數の學生を收容し、支那等の留學生をも引受け、又海外にも留學生を派遣して隆昌發展したのであります。

勤王正墻薫

正墻薫は幕末にあたつて國事の爲めに奔走して、勤王の大義を唱へ、因幡藩の士氣を動かして大功のあつた人であります。

薫は適處と號してゐて學問頗る博く、才能人に勝れ又詩文に巧みであつたから、人は適處先生と呼んで尊んでゐました。勉強の爲めには千里を遠しとせずして學者を訪問しましたから日本國の名ある箇所は殆ど巡歷つたと云つても宜しいのです。隨つて名ある人々と交際を結んでゐましたから天下の形勢に精通して幕末維新の間に活くに好都合を得ました。

あるとき勤王の士平野國臣はひそかに書翰を適處の所によせて、國內國外の形勢を告げて來ました。此頃適處は因幡藩の儒官になつてゐましたが國臣からの通知を見て「我因幡藩の武士は田舍に無事太平を樂しんでゐる時でない。よろしく立つて國家の大事に活動かねばならぬ」と同志の者を集めて當時の有樣を詳しく談話しました。この事は深い感化を藩士に與へて、其後因幡藩の武士で國事に盡した人が大勢現はれました。是、偏に適處先生の勵ました所であつたのです。

適處が因幡藩に仕へて儒官となつて居た時、藩主慶德公は學政を盛にしやうとされましたから薫は主として學事に關する意見を上りました。藩主はそれによつて大に學館の擴張を行はれました。

王政維新の後、仕をやめて、心を風月に寄せ靜に樂

しんて暮しました。明治八年殘くなりました。詩は殊に巧みで立派なものが殘つてゐます。

著書　漫遊詩草　研志堂遺稿
　　涙餘夢卷

大道叢誌社長　川合清丸

大道社の社長として精神界の方面に多年つくし現に精神教育につとめつゝある川合清丸は、日本國教として神道、儒道、佛道を擧げて其本主旨を明にするを以て主義とし、日本的な神儒佛を說いて、國民を擧げて此國教に歸せしめんとしてゐるのであります。

清丸は伯耆西伯郡の人である、京阪の間に多年勉强してゐましたが、ある時、鳥尾得庵居士に會ふて儒佛の大道をきゝ、大に感ずる所があつたので請ふて

師弟の約を結び坐禪して佛道の蘊奧を極め、後、東京に出て、明道協會の幹事として活動いた。又、得庵居士の出版してゐた保守新論、中正日報等にも關係してゐましたが、明治二十一年一月大道社を創立して精神界につくすこと〳〵なりました。同二十五年に大道館を開いて、前後五年間、學生を養成しましたが、廿九年廢校して、今日では、專ら大道叢誌に執筆すること〳〵ありました。

大道叢誌を發刊する大道社といふのは明治二十一年の創立であることは前に述べましたが其創立者は故山岡鐵舟、故本莊宗武、本縣の川合清丸であつたのであります。そして說いた所の言議は忠孝の大義神道佛道儒道の根本義　大和魂に關するものであります。社友として川尻寶岑等が援けました。

川合清丸著書
　佛教演說　譯陰隲錄
　女子教訓書　日本魂
　日本庭訓

前第百銀行頭取　高田小次郎

東京日本橋區萬町の通りを東に行つて將に盡さんとする所に、右と左との町角を占めて、雨々相對する建物がある。右にあるは第百銀行で左にあるは東京貯蓄銀行である。何れも劣らぬ勢力を持つて實業界に雄飛しつゝある。此二つの銀行は高田小次郎の經營する所であつて、高田小次郎は第百銀行の頭取東京貯蓄銀行の取締役である。

高田小次郎はもと岩美郡行德村の人因幡池田侯の家臣であつたが、明治維新の大業が行はれて廢藩置縣となつた時、新時代に應ずることを行つて一つには舊主人の恩誼に應へ　二つには社會民衆の爲になることを行ひたいと考へ、多くの藩士は四方に散つてしまつた後、銀行業こそは新時代に必要なものであると、原六郎と相談して銀行を起すことになり、それに就ては第一に舊藩主池田侯に大株主となつて貰ふことであると、大部分を引受けて貰つて立てたのが第百銀行であります。

第百銀行を創立してからは、一所懸命に其發展をはからねばなりません。君は事務長となつて、銀行の事務を整理して餘念はありません。當時、銀行業者の間には惡い風があつて何でも華美を競ひ驕奢に耽つてゐましたが、これでは銀行業は發達するものでないと考へて質素儉約を旨として、銀行員一般にも此風を守らせ十年一日の如く熱心に活動きました。

ところが銀行の信用は、次第〳〵に增して來て取引先が增えて來ます、銀行の積立金も千万圓に殖えて來ます。ます〳〵繁昌して今日の樣になりました。

小次郎は尙ほこれで滿足せず、勤儉貯蓄の風は、これから益々必要である。此美風を國民一般に知らせなければならぬ、それについては貯蓄銀行が必要であると前に述べた東京貯蓄銀行を設立したのであります。

これを以てもまだ滿足しない、保險事業は社會に危險が存在する限り一日も忽にすべからざるものであ

ると明治火災保險會社を設立し推されて其重役となりました。そして其營業に大に盡瘁しました。すなはち高田小次郎は第百銀行頭取　貯蓄銀行取締役　火災保險會社重役として株主の信用を一身に集め銀行界に大に盡した人であります。因に行德村聖神社の大鳥居は小次郎の寄進であります。

子爵河田景與

河田景與は舊鳥取藩士で、祿二百石を食んで居ました。幼い時から文武両道に志し、最も劍術が得意でありました。夙くから勤王の大義を唱へて居ましたが、當時藩中には勤王の說に對する意見が區々で決りません。依つて文久三年八月或る夜、景與等二十二人の同志が連合して京都本國寺なる藩主の旅館に打ち入つて、因循黨四人のものを殺して君側を淸め、因幡藩勤王の誠意を明らかにしたと云ふ話は、世に名高いものであります。併し景與は、この爲めに謹愼の處分を受け、尋で長州事件に關係したために重ねて罪を得、遂に脫れて諸方を流涙し、密かに勤王の士と交はつて時機の至るを待つて居ましたが、明治元年二月に至つて遂に許されて鳥取藩に歸參することゝなりました。そこで同年三月には官軍の參謀として出征し、宇都宮の役で大なる戰功を立て、河田の名が遠近に轟き渡つたのであります。それより上野の役、小田原攻、箱城平の戰、會津の役等に出征して功を立てました。凱旋の後には勳功によつて朝廷より御太刀料として金貳百圓と永世賞典錄四百五十石とを賜はり、藩主も亦三百石を與へました。後、江戸府判事に任ぜられ、次で判事として各地に轉任し、更に兵部大丞となり、後また京都府大參事に任ぜられ、遂に鳥取縣權令に轉任し、明治十七年には元老院議官に任ぜられ、同二十年に至つて特旨を以て華族に列して子爵を授けられ帝國議會の創設に際して貴族院議員となりましたが二十五年四月に至つて病を以て職を辭しました。そ

れより後は一切、世の中のことにかかはらずして唯子弟の敎育にのみ身を委ねて居ました。三十年十月病に罹り特に從二位勳一等に叙せられましたが、同月十二日を以て遂に薨去つたのであります。行年七十歲でありました。

老農　中井太一郎

傾かんとする家運を起す。　中井太一郎は東伯郡小鴨村字中河原の人、天保元年に生れた。家は代々農を業とする富豪であつたが太一郎が未だ少年であつたとき、家運漸く拙く家產も傾く悲運に陷つた。父の與左衛門は之を苦にして病にかゝり遂に死んだ。太一郎は父の死後傾かんとする家の負債を擔ひ母と姉弟を扶養つゝ窮乏の家計を續けねばならぬ破目になつた。此時太一郎は十八才の靑年であつたが堅忍にして克己の精神は富んでゐた彼は益々勉勵家道恢復を目的として、勤と儉とを以て是非此目的を達せねばならぬと悉く婢僕を解雇して、自ら鋤鍬をとつて牛馬を使役し、家具の餘りあるもの衣類調度まで大概は之を賣り拂つて負債償却の費用とし約四年間といふものは貧困と戰つて漸く負債を拂つてしまつて獨立の生活をすることが出來るに至つた。

鳥取藩の命により改正方となる。　太一郎が熱心に農事に務めてゐるとき鳥取藩から改正方といふ役に擧られた。改正方といふのは地方に弊風の存在するのを藩に上告し且之を改善するのが任務であります。此頃惡い風習があつて貸送といふことが專ら行はれてゐた。貸送といふのは郡內各村で租稅が調はぬ時に大中庄屋等が代つて之を納め其立替高に對して年四割三分の高利を收めてゐた事である。此習慣がある爲めに貧村の負債は益重なり毎年々々負債が多くなる計りで償還の見込が付かない。郡村は疲弊する計りであつた。太一郎は其全廢を唱へて庄屋側から反對あるに拘はらず全く此慣例を破つてしまつた。これは實に町村の貧乏を救つた大なる功

績であつたのである。

農事、農具の改良に盡す。　其後太一郎は植物方といふ役となつて樹木植付けの勸誘をして町村の利益を計り、又中庄屋となつて村政の改良貧民の救助等について計畫を立てたものが頗る多い、廢藩置縣後其地の戸長に選ばれて種々の功績を表した。太一郎は專ら意を農事に潛め實驗上より得たる智識を基として種の著書をなして之を人に勸めた。又農事の改良は農具の進歩にあると除草器及田植定規等を發明した。除草器は太一車として今日の農家が皆用ひてゐる所である。太一郎は今日の樣な教育を受けたのでない寺小屋で素讀と珠算を習つたに過ぎなかつたが、かく農事林業の改良に功ある人となつた。是實に彼の熱誠が然らしめたのである。明治十四年には特に綠綬褒章を賜つて其功を賞せられた。

著書

稻作改良實驗記草稿　大日本簡易排水法
大日本稻作要法　豐作改良稻作栽培要法

元愛媛縣知事　本部泰

本部泰は、舊鳥取藩士で、天保十四年七月に鳥取馬場町に生れました。幼い時から、普通の子供と異つて、つまらぬ遊びに耽ると云ふやうなことが嫌ひでした。早くから學に志して、和漢の學を修めて居ましたが、其の成績は、常に同輩中に抽出て居まるを恥とし、大いに社會に雄飛しようと云ふ念が常に心中を離れませんでした。

そこで、年二十一歳の時、志を決して鄉里を出で、雲州松江に行つて、島根縣警察部に奉職したのを手初として、後、榮轉して郡長に任せられ、更に進んで鳥取縣書記官となり、次いで京都府書記官に轉じ山縣公の選拔により遂に愛媛縣知事に昇進し、到る處、敏活に事務を處理し、大いに功績をあげましたが、知事退職の後は、鄉里に歸へつて、專ら地方の公共事業に身を委ねて居るのです。

公共心　泰は、社會一般の人々の如く、老後閑散を貪るを肯しとせず、一心に、公共のために働きたいと云ふ考で、今や鳥取市教育會長、因伯同志會長、因伯海事談話會長、因伯尙德會長、因伯彰忠會長等となり、各々其の責務を盡し、其の任を全うして居ます。されば、その令名は、四方に傳へられ、縣下有數の名士として、社會に重んぜられて居るのであります。

潔白　泰は、因伯彰忠會の會長として、多年熱心に盡瘁した功は空しからずして、同會は、實に立派なものとなりました。そこで昨年四月同會の役員會の開かれた時に、その功勞を謝するために、相當の慰勞金を贈らうと云ふ議が起りましたが、同席して居た泰は、これを聞いて端然となり、「私が彰忠會のために微力を盡すわけは、君國のため忠死した人々の靈を聊かにても慰め且つ其の誠忠を永く輝かさうと思ふが爲めであるので、決して報酬を得ようが爲めでは無い。功勞とか、慰勞金とか云ふやうなことは、以ての外のことである。私は左樣なものを受ける理由は無い。また、斷じて受けることは出來ぬ。」と、顏色をかへ、きつぱりと其の議を拒みました。そこで、役員等は「潔白な泰翁の性質としては、さうあるべきことではあるが、功勞者としての慰勞は是非せねばならぬ。それには、翁を同席させては給むることが出來ぬ。」と云ふので、その後、窃かに役員會を開いて、若干の慰勞金を贈ることに相談を取りきめ、その手續をしたところが、泰は「あれ程辭つて置いたに、斯樣なことをせられたのは、私の不本意とするところである。併し、折角の厚意を無にして、突き返すも失禮であるから、御受けしよう。」といつて受けましたが、この慰勞金を身に着けるを潔しとせず、「何か適當の使ひ向きを」と、種々考

へた上、招魂社前に石燈籠を寄進しようと決心し、直ちに當業者に注文して、本年の祭典に間に合ふ樣にと、その製作を急いで据付けました。この石燈籠は、高さ二丈の大燈籠で、總經費百六拾餘圓を要し頗る立派なものです。泰の潔白は、この石燈籠と共に、末永く、光を放つ次第であります。

●掲載人員貳千人（詳傳附）●

今古 鳥取縣 書畫百藝名人集

●定價貳拾錢 送代四錢

書家、畫家、歷史家、學者、詩人、新發明家、歌人、俳人、狂歌師、高僧、刀匠、長壽者、美人、陶工、漆工、鑄工、製紙、金具師、番匠、算數學者、果樹成功者、茶人、挿花家、故實家、政府表彰者、鳥取縣表彰者、鑑定家、謠曲家、將棊、愛劍家、盆栽家、能樂、音樂、人物養成、古錢家、武藝、近代名士、其他夥しき項目あり

發行 鳥取市大工町筋 横山書店

大賣捌 鳥取平木 仝尚文館 仝光文館 倉吉德岡 仝桑田 米子今井 仝支店境村尾

事業 坂口平兵衛

坂口平兵衛は安政元年を以て西伯郡米子町に生れました。幼い時に今井方齊の門に入つて漢籍を修めましたが、年僅かに十三歳の時から家政に與り、父を扶けて商業を勵みました。明治十四年に至つて父が死去なつたので家督を繼ぎ、父の名を襲うて平兵衛と改めたのであります。

平兵衛は一意專心に家運を隆にしようと志し、僅か十餘年にして資産を增殖し、明治二十三年には既に縣下多額納稅者互選資格を備へる樣になりました。又明治二十一年米子魚商株式會社長に、同二十四年米子汽船會社長に、米子製糸台名會社長に、縣勸業諮問會員に、米子商工會頭に、同二十六年米子米穀取引所理事に、同二十七年米子銀行頭取に、同二十八年山陰生命保險會社監査役に、同三十年郡會議長に、貴族院議員に、地方的團體として勢力ある丁酉會長に、同三十四年米子倉庫會社監査役に推されたことによつて見ても如何にその信用と名望とを高めて居るかを知ることが出來ませう。

平兵衛は温順で忍耐力強く、そして、實業界に活動して居ることは縣下稀に見る所であります。現今製糸業、製鐵業、酒醤油製造業等を營んで居ます。

前年政府より米國實業調査員に選ばれて、澁澤男爵以下四十餘名と共に米國の各地を巡覽したことがあります。大正三年、六拾一才にて還暦祝に際し縣下教育界に金壹萬圓を提供して中等教育を終れるも學費なく高等教育を受けんとする前途有望の青年の學資金に寄附せられたのは誠實に見上げた事であります。

名望 佐伯友光

佐伯友光は東伯郡赤碕町の人で、弘化四年二月に生れました。家は、なか〳〵名ある家柄で、父の代迄は世々醫を業とし且つ郡の長職を務めて居ましたが友光の代となつてから、藩籍を脱して農となりました。

また、幼い時から學問に志し、名ある人に就いて和漢の學を修め、又武術を學び、其の上、挿花、謠曲、繪畫などの技藝までも一通り學びました。そして、多年の間種々の公職をつとめ、該迫のために非常に盡しつゝ今日に至つて居るのであります。

友光は、幼い時から人並優れて居て、子供等と一しよに遊ぶ時には、いつも必らず頭に戴かれて居ました。又三四歳の頃から習字が好で、毎朝寢床の上から筆や硯を弄ぶを常例のやうにして居ました。だん〳〵年取るに從つて歷史譚や忠臣義士傳を好み、これを讀み出すと、しばしば夜明に達するやうなこともあつたと云ふことです。

友光は讀書することと、書をかくことゝを此の上も無い樂みとして、暇さへあれば一心にこれを勉強して居ます。そして冬の如何に寒い日でも、書齊に正しく坐して、小さな火鉢を側に置いてこれで凌ぐと云ふ風で、病氣の時より外には、火炬に身を寄せたことが無いさうです。

友光の人柄は、温厚着實で、德義を重んじ、少しも身なりを飾りません。又度量が宏くて一度も怒り聲を出して妻子や僕婢を叱つたことがありません。又、人と交はるには、少しも隔心を持ちません。それであるから、家庭は、誠に能く一致親睦し、人は能くなづいて尊敬して居るのであります。

特行　友光は公共事業や慈善事業のためには、常に人に先んじて力を盡し自ら模範を示して衆を勵まして居ます。その重なるものを擧げれば、日本赤十字社支部の役員としては、自費を以て勸誘書を作つて諸方に配り、其の他種々の方法を施して社員の募集に力めました。大日本武德會の地方委員としても亦同樣でありました。又前年赤碕郵便局に電信局併置の當時には局舍の建築費として多額の金と其の敷地とを寄附し、且つ開場式の費用は全部一己で引受けました。それから彼の山陰鐵道布設に着手の當時、赤碕附近の敷地買收のことを告げられた時に、友光は、「たとひ祖先傳來のものと雖公共の爲めならば一時も躊躇ふべきことでは無い」と人に先んじて快く承諾し、引いて他の土地所有者の決心を早からしめたのです。

明治三十七八年戰役の事あるに當つては、一家大儉約の規定を設けて赤十字社へ金員を寄贈し、又每回勸誘を待たずして國庫債券の募業に應じ、第四十聯隊出征軍人の家族、遺族の救助に力を盡し、赤碕町内出征軍人の家族遺族の救助方に對しては特に會を設け、地方戰病死者の葬式には常に多額の費用を投じて同情を現はしました。

其の他學校に義捐し、或は貧民を賑はすなど實に夥しいものでありました。

されば宮内省より、賞勳局より、或は各府縣知事より、金杯、銀杯、木杯及び褒賞狀、金品等の賞與を受けたことが前後數十度に及んで居るのであります。

光榮　明治二十七年四月に北白河宮殿下が御巡視の際、友光の宅に御立寄りになつて晝飯を召させられたことがあります。又明治三十年四月に日本赤十字社總裁小松宮殿下の御巡視の際、鳥取支部社員總會の開かれた時には、殿下の御前に於て支部社員七千餘名の總代として祝詞を朗讀し、且つ特別の御思召により再三殿下に拜謁仰せ付けられ、次で自宅に殿下が御臨みになつた節に家族一同へ拜謁を賜はりました。此れ等は一家の光榮として永く傳ふべきことであります。

愛馬壽號　友光は元來畜産の熱心家であつて常に此の業の改良發達に意を用ひて居ました。ところが、日露戰爭の際に世界に勇名を轟かした乃木大將が旅順を陷れ、城開け渡しの折に、露將ステッセルは自分の愛馬を乃木大將に贈つたので大將はこれを率いて凱陣し、其の名馬を壽號と名づけて愛育して居ました。折しも上京中の友光の子友文は、これを聞いて「種馬にしたいものだ」と思ひ、人を仲に立てゝ其の名馬を所望しました。處が大將も至つて慾氣の無い人ではあるし、又佐伯父子の心掛に感じて遂に其の名馬を讓りましたので、友文は喜んで率さかへり今に愛育して居るのであります。

武士道皷吹　信夫恕軒

赤穗義士の研究と其講演とで有名な信夫恕軒は鳥取藩士であつて江戸の藩邸に生れたのであります。其二才の時父を喪つて不幸な境遇に成長しましたが、幼い時から學問を好んで、大槻盤溪について漢學を修め經史を講究するかたはら文章文辭を修めて熱心勉強しました。しかし貧困に育

ちましたから彼方此方に住所を轉じ衣食にさへ事缺ぐことがあつて不自由に暮しました。併し氣力は少しも衰へず勉強に一所懸命でありましたから學問は大に進歩して來ました。

明治の初年になつて東京の本所區に居て、儒學の講義を初めましたが、博覽強記よく通じてゐましたから其評判は大層なもので、忽ち弟子入するものが澤山出來、其名譽は一層加はつて來ました。

この時、大學では儒學の講師を求めてゐましたが、恕軒が儒學に精通い事を聞き依賴で大學の講義をして貰ふ事にしました。恕軒は儒學のうち易經及詩經に精しく左傳史記等ゐも通してゐましたから其講義は水の流るゝ樣で聽くものが倦むことを知らない。詩經を說けば、其時代の人情風俗に說き及ぼし、講義の間には俚諺や諧謔を交へて智慧が縱橫に活らきます。又筆をとれば千言萬語立ろに成ると云ふ天才でありました。

大學に在ることが數年でありましたが之を辭めて、

專ら赤穗義士の事を研究ることに力をつくし、其事蹟を衆人に述へ傳へやうと考へました。衆の人に傳へるには一方は文字によつて之を書き一方は口に語つて傳へねばなりませんから恕軒は赤穗誠忠錄等の書物を書くと同時に機會さへあれば其事蹟を語つて人に聽かせました。ある時芝高輪の泉岳寺で、義士復讐の顚末を語りましたが、聽くものは感に打たれて中には涙を流してゐるものがありました。恕軒が義士を語るときは何時でも此樣であつたのであります。

恕軒は明治四十三年十二月十一日年七十六病で歿くなりましたが死ぬるまで義士の事蹟を述べ傳へたのであります。義士の話を聞いて感奮蹶起した人は幾人あつたか判りません。これ等は通俗教育の仕事でありますが、今日東京に通俗教育會といふがある筈です、これも恕軒の力によつて出來たのです。三重縣、和歌山縣にゐた事もありましたが傳へる程の事はありません。

著書

女子美術學校長　藤田文藏

女子美術學校長として盡しつゝある藤田文藏は舊鳥取藩士であつて、文久二年因幡國岩美郡の生れである、幼少の時から美術思想に富み、頗る彫刻を好んでゐた。偶々東京の某校で、外國から彫型の教師を迎へて之を授けると聞き、上京して此處に入り一意專心其技を磨いたのであります。

明治十五年六月卒業して出たのでありますが、當時は未だ我國の事情は泰西の美術を解する程の度に進んでゐなかつたのでありますから、彫型の業で以て世に立つことは困難でありました。そこで文藏は青年女子の教育に身を投じ或は基督教の傳道に力を致し傍ら其技術を磨いてゐたのであります。此間殆ど二十箇年間。

明治三十三年に至つて文藏の技術は社會に認められて美術學校の教授に推され、其名が世に高くなつた。それから文藏は、女子美術學校を設立して多年婦人社會が要求してゐた希望を充すことゝなり、今日ますゝ熱心に女子美術教育に盡してゐるのであります。

教訓句集

◉螢から一字一字の光かな　蓼太
◉千なりや蔓一すぢの心より　千代
◉精出せば氷る隙なし水車　蓮之
◉口あいて腹を見らるゝ柘榴かな　古句
◉雪の竹たゝくも慈悲の一つかな　虛白
◉さきのぼる末たのもしや花葵　柳角
◉上見ればかぎりなしとや百合の花　奈因
◉あるほどの伊達仕盡して紙子かな　園女
◉菰かぶる下に錦や冬牡丹　古句

忠烈　須知源次郎

日露戰爭の當時、かの有名なる運送船常陸丸と運命を共にした陸軍中佐須知源次郎は、實に惜しい軍人でありました。

中佐は、萬延元年六月に、鳥取城下江崎町なる森と云ふ藩士の家に生れ、後に親戚なる須知家の養子となつたのです。

幼少の時は、鄕里にあつて和漢の學を修めて居ましたが、豫ねて武を以て身を立てようと云ふ目的であつたので、十六の年に東京に上つて教導團に入り、後に士官學校に移つて、明治十七年に少尉に任ぜられ、近衛第三聯隊附になりました。其の後、間もなく參謀本部附又は乃木大將の副官となり、日清戰爭の時には山縣元帥の副官となつて從軍し、後、更に野津大將の副官となつて大に戰功を立て、功五級金鵄勳章を賜はりました。

されば、此の戰爭の後は、早くも少佐に進み、間もなく選拔せられて佛蘭西へ留學を命ぜられ、四年間、彼の地にあつて、非常の熱心奮勵を以て軍事上の研究を遂げ、新智識を得て歸朝し、明治三十六年四月には中佐に上り、近衛歩兵第一聯隊附になりました。

所が、其の翌年二月、露國と戰を交ゆるに至つて、同年六月十五日、近衛後備歩兵第一聯隊を率ゐ運送船常陸丸に乘つて戰地に向ふ途上、玄海洋に於て、突然に敵艦に襲はれ、行年四十五歳を一期として、遂に海底の藻屑と消え失せたのであります。

常陸丸遭難（中佐の最期）

須知聯隊を載せた運送船常陸丸は、六月十四日に宇品を發し、名に負ふ玄海洋にさし掛つたのは、十五日の午前十時頃でありました。

此の日、海上は、至つて平穩であつたけれども、四方が霧に掩はれて何物をも見ることが出來ません。唯遙かに砲聲が聞ゆるばかりです。此の砲聲こそは、今しも敵艦が、運送船和泉丸を砲擊しつゝあるのだとは、神ならぬ身の夢にも知る筈もなく、「多分我が艦隊の演習を試みつゝあるのであらう」と、皆は平氣で笑ひさざめいて居たのです。

すると、立ち込めたる霧を破つて沖の方に軍艦らしいものが二三艦見えました。けれども、此方では、「彼所に味方の艦隊が居る哩」と、却つて心丈夫に思ひ、關はず進んで行くと、豈計らんや、此の艦共は何れも露國の旗を立てた彼の浦鹽艦隊であるから、ハッと思つたが最早遲い。此の上は、尋常に敵に談判して、兵士以外のものを助け、兵士は其の後で見事討死するの外は無いと云ふので聯隊長須知中佐以下皆覺悟を極めて居ると、敵は、早くも常陸丸を取りこめ、亂暴にも砲擊を加へたから、憐れにも船は破られて進退の自由を失ひ、乘組の者は、これに擊たれて倒れるもあれば、思ひ切つて自殺する者もあり、見る見る中に、船の上は非常の騷となりました。

茲に至つて須知聯隊長は、「最早これ迄なり」と、部下一同の者を上甲板に集めて最後の別れを告げ直ちに自分の室に立ち歸つて大久保少尉の捧げたる聯隊旗をば、手に受けて都の方を伏し拜み、秘密書類等殘らず燒き棄てて「此の上は思ひ置く事は無い。唯一人でも生き殘つた者があれば、本國へ此の事を言ひ傳へよ」と、部下

の兵士に言葉を殘し、軍刀を引き拔いて切腹しました、其時敵艦から飛び來つた砲彈を其の身に受けて遂に悲壯な最期を遂げたのであります。

謹直勤勉　中佐が教導團に在學の當時は、維新後、間も無い時であつたから、諸學生は、漫りに豪傑を氣取つて素行を省みない。金錢をば、丸で土塊か芥の如くに見て居た。それで、少しでも金を持つと、忽ちこれを酒食のために費し、或は何か口實を設けて父兄に送金を乞ふと云ふ風が盛に行はれて居たのです。然るに、獨り中佐ばかりは、此の惡風に染まることなく、謹直を守り費用を節約して、官から受ける僅かな手當金で萬端の用を濟ませて居ました。それで、鄕里を出てから、唯の一厘の金も父兄に求めたことがなかつたのです。

斯樣な人であるから、學問を勵むことも非常なもので、一日たりとも無益に時間を費すこと無く、休業日に、他の學友等は、各自其の思ふが儘の遊びに耽る時でも、自分は學びの窓に日課を勵み、或は敎師や先輩に就いて疑を質すことを例として居たと云ふことです。

忠君愛國の氣象に富む　中佐は常に忠君愛國を口にしてこれが實行に力め「少しでも此の道に缺ぐる行があれば獨り我が名譽を傷くるばかりでは無く、舊鳥取藩の威名を損じ先輩諸士の名を汚すわけである」と云ふので嚴に自ら警めて居ました。

斯樣な心掛であつたから、日露戰爭出征前に、廣島の宿舍で、自分の居間に大元帥陛下の御眞影の軸を掲げ、其の前に聯隊旗を置いて毎朝毎夕及び出入毎に必ず敬禮を行ふことを

例として居ました。ところが、宿舍の主人がこれを見て、「中佐の斯樣なことをするのは、唯人の見て居る時ばかりで、故らに見えをつくるのではあるまいか」と思つて、或日ひそかにこれを窺つて見ると中佐の敬禮は少しも平日に異なるところが無いので、主人は、中佐の行爲に表裏の無いことに感服し、假りにも、中佐の心を疑つたのを耻ぢたと云ふ話があります。

軍紀を重んじ部下を愛す　中佐は、常の行狀が誠に嚴格で、軍紀を重んずること神の如く、苟も之を紊る者は、用捨なく罰する樣にして居ました。されば、聯隊內に於ける號令は、常に嚴肅に行はれ、出征前、人心のあだふだする際に當つても、須知聯隊の風紀は、正しく保たれて、殆んど其の平生と變るところが無かつた。

一體、出征軍隊は、勇氣の盛んな餘りに、稍もすれば粗暴に流れる傾があつて、そのために、滯在地方の人に迷惑をかける樣なことがあり勝ちです。然るに、須知聯隊の廣島滯在中には、斯樣な事は露程もなかつたので、市の人々は、「是こそ眞に近衞兵の行動である。國家の干城たる軍人の風紀は、かくこそありたいものだ」と云つて、自ら敬慕の念を起し、聯隊長其の人の德を譽めたたへたと云ふことであります。

中佐は、軍紀に對して斯樣に嚴格であつたけれども、其の他の場合には、部下を愛することと我が子の如くで、現に、彼の常陸丸に乘つて、いよいよ宇品を發する時も「乃公は、今度の出征に當つて、大切な兵士を預つて居るから、一人でも無駄に殺してはならぬと、其のことばかり心配して居る。しかし、今日は、天氣もよし、又、船も堅牢であるから、これで少しは氣が安まつた。」と喜んで居たさうです。然る

に、此の言葉が無効となつて、無慘の最後を遂げたのは、かへすがへすも、口惜しき次第であります。

悲壯須山萬

須山萬は維新前に勤王の大義を稱へて國事に奔走し、終に幕府に捕へられて不幸なる死を遂げた人であります。

萬は伯耆國西伯郡日吉津村の醫師須山啓藏の二男であります。幼い時から武術を好み、腕力は人に超えてゐました。十三四歳の頃には米俵を輕々と提げる程の力がありました。

だん〳〵成長するに隨ひ刀術の稽古を致しましたが、其方法は藁を庭木に吊つて置いて之を切るのでありました。固い樹の枝などは容易く切ることが出來ますが藁のやうな軟いものは容易に切れません。萬は一方かやうにして武藝に熱心でありましたが又一方書史を好みまして其熱心は並大抵ではありませんだ。或時の如きは厠の中でも大聲に暗誦してゐるといふ程でありました。

十七歳になりますと鳥取に出て藩の學者正墻薫について學びました。薫は熱心に學問を授けましたが、萬の學力はズン〳〵進んで行きますので大坂の學者藤澤東該を師とする樣に周旋しました。

萬は大坂に出て東該の門に入つてゐましたが。一月ばかりて江戸に出で鹽谷宕陰について學んだのであります。萬は江戸で勉學し學問識見が大に進みましたから藩に歸つて周旋方といふ役につき東西に奔走して勤王の事につくしました。文久四年に藩の用事を帶びて京都に上り更に江戸に赴きました。此時勢力の强かつたのは長州藩と水戸藩とでありましたから、萬は長州の藩士、水戸の藩士と交を深くして共に大に國家の爲に盡力さうとしました。

此時長州藩は幕府から嫌疑を受けて多くの藩士が捕はれ、又長州と交際を結んでゐるものは、すべて捕縛されて嚴重な詮議をされました。萬は姓名を變じて長藩留守居役遠藤某の僕となつて匿れてゐましたが、幕府の搜索はいよ〳〵嚴重になり、元治元年十月廿六日幕吏數十人に圍まれて遂に捕へられ拘禁の身となりました。

萬は勤王の爲めに働らき其志も遂げないに獄舍に入れられてゐるのを殘念に思ひ、或日番卒の隙をうかがつて逃げ出し髮を剃つて僧となり所々方々に匿れてゐましたが、さる屋舍で入浴をしてゐる時再び捕へられました。

萬は種々に辨疏をしましたので嫌疑がはれやうとしましたが、不幸にも其友人から受取てゐる信書が證據となつて傳馬町の牢獄に入れられることゝなりました。

萬は幕府から非常に忌はれまして、同十一月八日千住原で斬首せられることに確定まりまして刑場に曳き出されました。萬は少しも恐れず幕府の政治の惡るい事、勤王の大義に背反いてゐることを大聲で述べますので、刑吏は大層怒つて其齒を拔き取ります、しかし萬は少しも屈しません。其悉くの齒を拔き去られても

罵ることを止めませなんだ。遂に殺されましたが、見るもの舌を巻いて驚いたといふ事であります、年は未だ二十三でありました。

明治三十一年七月四日、其勤王の志篤きを賞せられ、特旨を以て正五位を贈られ靖國神社に合祀することを仰せ出されました。

名工　宮本包則

宮本包則は刀工の名人として其の名を知られて居ります。東伯郡竹田村大字大垣村の人で、天保元年の出生であります。近所に刀研師の家がありましたが、包則は暇さへあれば、その家を訪ねて刀研師から種々の談話を聞くことを此の上もない樂しみとして居ました。

包則は、豫ねて「刀劍の製作が世を追うて降り、新刀の如きは殆んど見るに足るものの無いのを嘆いて居ましたが、或る時、刀研師から「昔此の伯者から大原安綱、同眞守と云ふ父子の名工が出た」と云ふことを話し聞かされたために大いに心を動かされ、「自分も何うかして、そんな名工になつて見たい。一心になりさへすれば成熟せぬことはあるまい」と、爰に始めて刀劍を鍛へる事に志したのであります。

そこで、二十歳の時、備前長船に遊び、横山祐兼の門人となつて七年の長い間修業して國に歸りましたが、丁度此の時は彼の米艦渡來の當時であつて、武事を忽にしてはならんと云ふので、刀劍の需要が漸く盛になつたのです。そこで包則は鳥取藩の御抱となつて苗字帶刀を許されましたが、文久二年に至つて又も京都に出て深く其の技を研き、遂に天下の名工となりました。

されば其の名早くも九重に達し、慶應元年孝明天皇の仰を受けて御守刀を作り、次で能登守の稱號を授かりました。

或る時包則は「昔、三條宗近は稲荷山に祈つて小狐丸といふ名劍を鍛へ、備前長光も吉備神社に祈つて名刀を作つたと云ふことである。されば、自分も神の守護によつて名刀を作らう。」といふのて、稲荷山に百日間の參籠をしました。丁度此の時に當つて　明治天皇陛下が御即位あらせられたのて、包則に御守刀を作らせようと、山中に仰を傳へさせられました。包則は深く天恩の辱さに感泣し、一層精神を込めて打ち參らせました。後には伊勢神宮、琴比羅神社、靖國神社の寶劍をも作りました。又　今上天皇陛下、東宮殿下の御刀をも鍛へました。

明治天皇の御前に於て其技を御覽に供したこともありました。實に無上の光榮と言はねはなりません。

包則は、現に帝室技藝員として鍛刀に從事して居ます。そして今は早、八十餘歳の高齢でありますが、しかしなかくの元氣で、毎朝五時には必ず床を離れ、沐浴して工場に入り、鞴を手にして火を起し、如何

程寒い日も、暑い時も一度も仕事を懈るといふことは無いさうであります。

曾て或る人が包則に其の經歷を尋ねました。包則はこれに答へて「私の經歷といつて別段の事もありません。何でも人間は一つの意氣地を持つて居て、それを立て通すのが一番です。」と申しました嗚呼一つの意氣地、これが實に男子の眞髓であります。

漢學者　伊藤宜堂

伊藤宜堂先生は學問を以て世に立ち子弟を敎育して死ぬる迄一日も倦まれなかつた敎育家であります。先生の出生地は伯耆國日野郡江尾村であります。宜堂先生は幼少から學問を好まれましたが、初め荒尾氏に仕へ、後此處を辭して京都に出で更に江戸に出て大に勉學して名を成されたのであります。先生が最も多く學ばれたのは朝川善庵先生であります。

文政八年に歸國して米子に居られましたが、天保六年に出雲國神門郡上盪治村に移られまして此處に在ること三十年間　毎日諸生を敎へて行かれました。其塾を有隣塾といつてゐましたが先生の德風が名高くありますので石見國備後國等からも學生が集まつて先生の敎を受けたのであります。先生は門弟が一人でも出世する樣に始終心掛けて居られましたから才學の秀でたものは他地方の學者の許に送り廣く天下の學者と交らせて其學を進めさせられたのであります。

宜堂先生は常に弟子に敎へて其家業を勵み人の道に外れない樣にするのが誠の忠義孝行の道である。自分の身分をも顧みないで徒らに大言壯語するのは宜しくない。みだりに輕擧を起したりするものでないと固く示して居られましたから、明治維新の際に人の心が動搖いた時も靜に道を說いて門弟に示して居られたのであります。

宜堂先生は溫厚い性質で怒ると云ふ樣な事は無い。門弟で久しく仕へてゐた人も先生の怒られた容貌を見たことが無いと申してゐます。しかし体格は偉大く肥滿て居られて七十餘になられても少しも衰へた所は無かつたと申します。居常、身を持することが謹嚴深くて膝を崩して坐してゐられることは無かつたと云ふことであります。

先生の學問で最も得意であつたのは易學でありました。だから先生の修養は大抵易から來てゐるのであります。文久二年に鳥取藩の慶德公に召されて易の講義を依賴まれました。先生の言は吶でありましたが易には熟達して居られました。此頃先生は七十餘歲でありましたが鄕里に學校を建てる事を命ぜられて鄕

校を開き溝口、一部あたりの生徒を教へられました。

先生の德望の高かつた事は次の話でも知ることが出來ます。明治二年に池田慶德公が藩内を巡視なさいましたとき、先生の宅を訪はれました。其時慶德公は宜堂先生を尊敬して容易に上座に坐られなかつた、そして種々の閑談を聞いてお歸りになつたといふ事であります。

宜堂先生は老年になつても益元氣でいつも勉強してゐられました。七十の時に、或書の名人について書風を學ばれ、書風が一變したと云ひますが、此等によつて考へても、いかに先生が學問に熱心で研究に工夫せられたかが分明るのであります。

宜堂先生は明治七年二月十七日病氣で逝くなられました。其出生の年寛政四年七月から數へて八十三年になります。

先生が長らく滯留して教授してゐられました出雲の塩谷村（簸川郡今市近郊）の神門寺には碑を建て、先生の德を記念してあります。先生の著書には周易包蒙五十卷、續孝子傳三卷等數多くあります。

日本屈指の數學家　樺正董

數學家として有名な樺正董は鳥取市立川町の出身である。今日の地位に至るまでには至つて苦心

したものであります。今其概略を述べませう。

正董は豐裕な家に生れたのではない。貧しい家に生れたのですが其年は文久三年でありました。まだ今日のやうに學校がありませんから所謂寺小屋流の教育を受けたのです。立川の廣德寺が教育を授ける所でありましたから其處に通學つたのであります。しかし天性が頗る聰明で、他の兒童とは餘程違つてゐました。

年十三にして故郷を出づ。　年十三歳の時故郷を出て大阪へ行きましたが、これは勉強するに都合のよい所を見付けやうとしたのであります。しかし金錢があつて勉強に出たのでありませんから、たゞ着のみ着のまゝ、二三圓の金錢を持つて出ましたから大阪に着いたら最早一厘の貯へもありません。そこで奉公することになり、或家に傭はれました。奉公ですから主人の使歩き、時には子守などをも命令されます。正董は快くこんな仕事をしてそして、機會があれば書物を讀んで勉強してゐました。

暫くは大阪にゐたのでしたが、東京に行つたら大阪よりは勉強に都合がよからうと、伯父を賴つて行きましたが、伯父の手許に世話になる事も出來ぬ事情がありましたので、又自活する道を立てねばなりませぬ。十五歳の頃でありましたが、或學校の事務の手助けをすることになり、月に參圓ほどの給料を貰ふ樣になりました。

勉強するに書物を買ふ事も出來ぬ。　僅かばかりの金錢を得ましても中々一冊の書物すらも買ふことが出來ませぬ。もとより無用な費用は使用はぬのでありますが一冊の書物を買ふ程の金が殘りませぬ。そこで或時のごときは蜆貝を川で拾つて之を金に替へ、二回分も三回分も夫れを貯金して漸く一冊の書物を買入れる程の苦しい思をしました。

斯樣にして、閑暇ある度に勉强することを忘れませぬから、學問はだん〳〵進歩する。それに加ふるに天性良く出來る方でありましたから、其進歩は目ざましいもので、數學の方はズット勝れて來ました。すると彼方此方から、數學の教師として來てくれないかと云つて來ます。そこで彼方此方の學校に奉職しました。新潟、岐阜、奈良縣等の中等學校に行つたのです。著書代數學教科書は、全國中等學校に採用せられて居ります。

明治四十一年、歐米各國に於ける數學の狀態は如何なる程度にあるか調査る必要にせまられ、亞米利加合衆國からかけて歐羅巴諸州をめぐつて、世界に於ける數學の發達の情態を一々精しく檢べたのであります。歐州諸國を巡回つて歸つて來ると朝鮮統監府から招かれて、朝鮮人教育の事について相談をかけました。殊に朝鮮に於ては其民土風俗に應じて算術の教科書なども内地のものとは異なつて居なければなりませぬ。そこで正董は朝鮮に用ふる算術の教科書を編んだのであります。支那からも招かれて其教育の事について相談をうけたことがあります。

現今は慶應義塾、女子大學等の數學の教授として熱心に子弟の教育に從事してゐます。氏は數學のみならず、佛教についても深い信仰を持つてゐて教授の傍ら其信仰をすゝめてゐます。

正董は其性質至つて眞面目で、言行一致を尊び、かうと定めた事は必ず忘れないで必ず守つて行きます、人の方は忘れてゐても自分の方は忘れずに守つて行くと云ふ調子でありました。苦學して成長したのでありましたから生活も極めて質素で、下駄などは表付のものは決して用ひぬ、兵兒帶でも木綿でなければ用ひぬと云ふ決心で、一家をなす迄は其通り行つていつたと云ふことであります。

英文學の泰斗　頭本元貞

ジャパンタイムス社長兼主筆として内外人の間に名聲をはせた頭本元貞は日野郡の人である。

元貞は英文學に精しく、英文教育を普及させやうと心掛けた。ジャパンタイムスは英文の新聞である。この新聞が出來る以前、元貞は朝鮮にゐて伊藤公の下に活動いてゐたが公がハルピンで斃れてから後、北米合衆國に赴いて　北米時事通信社といふを經營し　通信事業を營み。日本と米國との間の事に盡さうとした。しかし思ふやうに成らなかつたので　大正元年　北米を後にして歸つて來た、そして自分で經營するに至つたのがジャパンタイムスであつたのである。

ジャパンタイムスは日本で發行する英文の新聞である。日本人と日本に來てゐる外人との間の事は此新聞に殘らず記載せられるから双方の間に物事がよく判明り、互に共同して行く上に大なる便利がある。そこで此新聞は内外人の間に重く見られてゐるのである。

元貞は英文を讀むことを廣くすゝめたいとジャパンタイムス學生號を發行し　又少年號を發行して　學生生徒に讀ませてゐる。これ等は教育の上に大に有益な事であると言はねばならぬ。

理學博士　村岡範爲馳

村岡範爲馳は八頭郡釜口村太田勇昌の從弟であります父は村岡秀藏といひましたが幼少のとき歿くなりました。嘉永六年十月の生れで、專ら母によつて育てられました。範爲馳は幼い時から學問が好きで、舊藩校たる尙德館に學んで常に優等の成績、しかも首席を占めて居たのです。されば遂に擧げられて同館の助敎となり、次で藩より選はれて三名の貢進生の中に入り明治四年に大學南校に入學して物理學を修めました。同校卒業後は文部省の屬官となつて報告課に勤務てゐましたが　十年には東京女子師範學校理學の敎員となり、尋て東京帝國大學講師となりました。明治十一年師範學科取調の爲めに獨逸に留學しストラスブルグ大學に入り十四年にドクトルオブフイロソフイーの學位を受け　歸朝して東京帝國大學敎授になりました。爾後、第一高等學校敎諭兼敎頭、東京音樂學校商議員等をつとめ、二十一年再び歐州に派遣されて翌年歸朝し、女子師範學校敎授兼敎頭となり、次で東京音樂學校長となり、明治二十四年には理學博士の學位を得、第三高等學校敎授となり、同三十一年から　京都帝國大學理工科の敎授となつて今日に及んでゐます。

氏は勉學人に超え、其研究に着手するや熱心な事は人の企て及ぶ所ではありませぬ。隨つて氏によつて新しく研究されたものが多くあります。其一二を云へば、炭類電氣抵抗、螢の光、金屬の蒸發氣も寫眞版に及ぼす作用、細粉の電氣抵抗、等の研究は氏が獨特の發見であります。是等の研究は學問の社會を利益して永久朽ちぬ所のもので、氏が博士號を得たのも　是等研究の論文の結果であります。氏は又音樂の方にも精通してゐて　祝日大祭日歌音樂譜審査委員に擧げられたこともあります。

著書

平民學校論略

鏡に映する現象論

開拓　上山吉次

上山吉次は氣高郡湖山村の人であります。同家はなかなかの豪家であつて、世々酒造業を營んで居ます。もとは岩美郡國府村宇宮下村であつたので國府屋と稱して居るのであります。

善良なる家庭　吉次は質朴な人で政治の方面には少しも手出しをせず、一心に家業のために努力して居ます。そして子福長者であつて、八人の子を持つて居ますが、一家は誠に圓滿で、世間稀に見るところの良風を作つて居るのです。

長子正美は高等工業學校を卒業すると直ぐに家業たる酒造に從事して理想的の釀造に力め、次子房太郎は其の開拓部に力めて居ます、又妻や娘たちは養蠶をはげみ、其の産額は湖山第一と稱せられて居ます。

吉次は報德敎を守り一年の初めに計を立てゝ一年間の出入を概算し又毎月の始めに其の月になすべき計

を立て、置きます。そこで一家のものは、それ〳〵自分の分擔して居る務を一心に勵むと云ふ有樣です。同家には、養魚場があつて鯉、鰻など澤山飼育れて居ますが、これに餌をやる役目は幼ない小娘に割り當てられてある。そこで小娘はこれを家庭に於ける我が大切なる務として毎日缺がすこと無くやつて居るさうです。實に模範とすべき善良な家庭と言はねばなりません。

湖山砂漠の開拓　吉次は、廣々たる湖山砂漠の少しも利用せられて居ないのを慨き、明治二十二年から湖山村東北部の砂漠を開拓して、松苗木數千本を植ゑ付けましたが、何分にも、砂漠の事であるから、苗木の育成はなか〳〵容易の業ではありません。又しても枯れ又しても枯れると云ふ有樣です。併し吉次は根氣强く、植ゑ換へ植ゑ換へして、毎日ろの地を見巡り、風の方向などに注意し、特に大風大雨の時は、深夜といへども現場を視察すると云ふ熱心と忍耐とによつて、現今は着々成功しつゝあるのです。又數百圓の私費を投じて、砂漠の中央を掻き分けて交通路を作つたと云ふ美擧もあります。

勤儉　筧　雄平

筧雄平は氣高郡美穗村の人であります。夙くより實業を以て身を立てようと志し、家業たる農業に力を盡し、傍ら酒類の釀造業を鳥取市に營み、又、筧融通合名會社を起しなどして、一心に其の業を勵みましたので、家は益々富み榮えて縣下屈指の金滿家となりました。今は代を讓り、身を佛門に委ね、風月を樂しんで靜かに餘生を送つて居るのであります。

特行　雄平は公共慈善の道に力を盡しました。今其の二三の例を擧げれば、特種部落の改善をはかるために、自費を以て學校を建て、教員の給料も自分で支拂つて、特種部落の兒童を教育し、又時々教員、神官などと共に部落民を集めて人の道を說き聽かせ、そして部落の風俗改良に力めました。

又、日清、日露の戰役に當つては、人に先んじて軍資金を献じ、國債に應じました、其の他公益のため や慈善のために金品を出したことは實に夥しいものであります。殊に感ずべきは　教育奬勵の爲めと して自村の學校に前後を通じて金壹千餘圓を寄附し、尙ほ四十二年一月に氣高郡内三十八箇所の學校に悉く金五拾圓宛を寄附したことです、斯く の如く其の特行が多かつたものであるから、明治四十二年に内務省から名譽ある選奬の榮を蒙り金貳百圓を下賜せられました。

積善　西尾柳衛

西尾柳衛は岩美郡的場村の人であります。西尾家は拾數代連綿たる豪農であります、舊幕時代には、世々苗字帶刀御免を蒙り、藩主から三人扶持並に御紋付御上下を拜領した程の家系であります。柳衛は、幼名を熊次郎と云つて居ました。少年の時から武術が好きで、擊劍や砲術を學びました。維新の際には、軍役人となつて長州征伐に從事し、石州濱田に乘り込んで少なからぬ功勞がありましたが、維新の後は鄕里に就て只管農業に身を寄せ地方の豪

農として、又慈善家として、世の尊重を受けて居ました。然るに、數年前病に冐され、醫藥も其の効を奏せず遂に歸らぬ旅に赴いたのであります。

公共慈善の行爲 柳衛は性質が至つて温厚で言葉寡く、家に巨萬の財産を積んで居るにも拘はらず、質素儉約を旨として、少しも驕り高慢ぶると云ふやうな風がありませんでした。そして、公共事業とか慈善事業とかに對しては、人から勸誘さるゝを俟たず率先してこれに應じ巨額の金品を投じて少しも吝みません。其のために、其の筋から木杯褒狀等を受けたことが實に澤山です。近くは去る明治卅七八年戰役中に、其の奉公事業として、また、軍人後援事業として、世の模範となつた行が多くありました。其の重なるものを擧ぐれば、國庫債券募集に際して、第一回壹萬圓、第二回壹萬五千圓、第三回參萬圓、第四回と第五回には各壹萬八千圓の應募をなし、三十七年五月には、日本赤十字社に金壹千圓を寄附し、又、出征軍人に對して、卷煙草百箇、梅干七十罐、手袋百個、足袋百足、慰問袋五十箇、毛布三十枚、草鞋三百足を寄贈し、或は戰捷の爲め、出征軍人健全の爲め自費を以て神佛に祈願したこと前後四回に及び、尚ほ、戰病死者の追吊供養のために施餓鬼大法會を施行し、其の他軍人遺族救助及び自村出征軍人保護として合計金貳百四拾圓を支出し、次いで三十八年鳥取歩兵第四十聯隊凱旋の際は、五百五拾圓の出金と、縣道筋に永久的の石造凱旋門を建設したのです。されば、明治三十八年、日露戰役後援の特志者と云ふ廉によつて、賞勳局から金杯を賜はり、其の特行を表彰せられたのは、實に、さもあるべきことゝ言はねばなりません。

小作人に對する同情 柳衛は、小作人に對して特に同情厚く、「我が倉庫に米を積むは全く小作人の汗と膏とのお蔭である」と云つて、小作人を最も大切にし、宛口米は、舊來の儘少しも引上げません。そこで小作人は何れも其の德に感激し、「切めて良米を作つてこれに酬いねばならぬ」と優良の米を作るに勉め秋になつて收穫を終れば直ちに宛口米を持參する、倉さへ開けば何の世話も無く我一勝に倉に持ち込むと云ふ有樣です。斯樣な次第であるから、同家の小作人は、コツタリした所があつて、自然、産米の改良に心掛けることが出來ます。今「同家の所有田地を一般の宛口米に引直したなら、或は現在の二倍の收入があるかも知れない」とは一般の評である。而かも同家では小作人を優遇する家憲を守り敢へてこれを引上げないのは、實に感心の外は無いのであります。現主柳右衛門も先代の志を享けて小作人に同情厚く一般地主の好模範として尊敬されて居ます。

齒科大醫　山村楳次郎

鳥取市出身山村楳次郎は北米合衆國にあること前後十三年在米の日本人と相携へて米國の天地に住してゐたが、國土民情が我國と大に異なつてゐる。民權自由の思想が發達して貴賤上下による階級的の思想が少ない、政治思想が進んでゐて各人自己の權利を用ふることが正當である。各人努力して自分の運命を拓くことに熱心、あくまで奮鬪努力して寸時も撓まない氣象、自由を愛して各自其手腕を發揮して活動する樣を見て、我國にも此氣象此風儀を入れたいと熱心に盡力した人であります。

楳次郎は鳥取藩士山村清瑳の二男で慶應元年二月の生れです。明治二年鳥取中學に入り後、笈を負ふて京阪の間に遊學したが明治十三年鳥取新報創刊のとき、同社に入つて筆を執つた。此時、自由黨の幹事林包明の知る所となつて、相携へて上京し、專ら自

由民權の說を唱へたのであります。この頃の我國の有樣は、口では自由民權を唱へてゐますが實はまだ十分に了解してゐませぬ、實際の行ひは自由民權にかなつてゐませぬ。そこで氏は蹶然起つて米國に赴き、彼の地の人情風俗を視察し、又自分も修業する所があつたのであります。

米國へ渡つて見れば何から何まで內地とは異なつてゐますから、種々の艱難辛苦に出會しましたが、よく之を堪え忍んで勉强し、後、考へる所があつて加州の公立大學に入つて齒科醫學を學び、業卒つて、桑港に開業しました。

桑港で醫業を開業しましたが其傍ら或は雜誌を發行して時事を論じ、或は日本人會幹事となつて在留邦人の爲めにつくし、海外に於ける日本國民の善良なる氣風をつくることを忘れぬのでありました。米國加州には鳥取縣の人も多數移住してゐて、ロサンゼルス市の郊外には特別に鳥取村といふ所があります。鳥取縣人が薔薇や菊や菫を栽培つてゐる所であります。それは別として、後、星亨が「歸朝して大に國家の爲に盡してくれ。」と勸めて來ましたが之に應せず、終に十三年間留つたのであります。

久しくして我國に歸つて見れば、社會のすべては驚くばかり進步して變つてゐますが、人の思想は甚だしく進んだと云へませぬ。まだ自由、平等の思想が眞に了解つてゐませぬ。そこで矢張り此思想の鼓吹につとめてゐるのですが、歸朝後、齒科を業としてゐますから內外の患者の治療の餘暇之に從事してゐるのです。此に特別に記すことは高山齒科醫學院に齒科法醫學の講義がありますが、これは山村楳次郎の擔任で、斯學は我國に於て講義せらるゝ嚆矢であります。

新聞の元祖　小泉忠藏

漸く廢藩となつて、まだ昔ながらのチョン髷を結つて居たとき、早くも新聞紙發行の事業に眼をつけた人は小泉忠藏といふ人である。

氏は早くも文明の空氣に觸れてゐたから、鳥取民報といふ新聞を計畫し、自分で記者となり發行したが、其當時は今のやうな便利な活字印刷機械がなかつた。それであるから原稿は一々木版に彫りつけてこれを刷り、讀者に配つたのである。時は明治五年頃の事であつた。

明治五年頃といへば日本全國にまだ新聞紙といふものは殆どなく、漸う東京日々新聞があるくらゐの時であつた。山陰道に於ては固よりあらう筈がない。この鳥取民報は實に山陰道に於ける最初の新聞であるばかりで無く日本全國からいつでも先驅をなした新聞であつたのである。斯樣な新聞が鳥取に於て初めて經營せられたのは實に鳥取縣の誇りである。

公共　山口嘉藏

大阪市の實業界に活動いてゐる山口嘉藏は倉吉町大字堺町五軒屋に生れたのである。家は至つて貧しかつたから、油や餅を賣つて其日その日の生計を立てゝゐた。其後ある家の丁稚に住み込んでゐたが、今から三十年以前丁度明治十八年の秋、兩親には「ちよと二三日出て來る。」といつたまゝ浴衣に單衣を重ねたまゝで大阪に飛び出した。

大阪に出て見たものゝ職業が決定つてゐるのではない、大川町あたりを彷徨してゐると尾道の人で山口玄洞といふものが大阪の主家土居善が破產した爲め、得意であつた家々を廻つてゐるのに會つた。そこで嘉藏は玄洞の手代となつて働くことゝなつた。主人玄洞は一所懸命に働いて衰へてゐる商賣の盛り返しに熱心である、手代となつた嘉藏は之を助け

て熱心着實に働く、この二人の力で、だんゞ商賣が繁昌し、山口の番頭として天晴れ腕を揮ふやうになつた。主人の信用はいよゝ加はつて其家の妹婿となり、山口の姓を名乘るやうになつた。

義兄の玄洞は嘉藏に壹万五千圓を與へて別に店を持たせることにした。そこで嘉藏は淡路町に家を持つたが、やがて神戸にうつり榮町に家を求めて外國人相手の取引を初めた。このとき端なくも日清戰爭が起つて取引の上に失敗を來した。しかし少しも失望することなく、大阪に引き上げて內外の會社からの製品を引き受けて委託販賣を初めた即ち卸屋相手の商賣である、品物は唐物か大部分であつた。其傍らモスリン製造會社を起して頗る活動したのである。其後京都製布會社に關係してゐて難かしい問題を解決た事などがある。

嘉藏はかくして成功の緒に就いたのであるが、故郷を思ふこと深く、先年倉吉中學校創立の時には六千圓を寄附し、打吹公園を設置する時壹千圓、倉吉圖書館に五百圓等の寄附をしてゐる。そして自分が貧しい中から生長したのであるから同情の念が深く見込ある少年で學資のないものには學資を給してゐる。そして「新年と寒暑の二期には手紙を呉れよ、金錢は返すに及ばず、國家に有用な者となれ」といつて學資を與へるのである、目下倉吉中學校生徒で六名、大學にあるもの卒業したものが數名ある。

先覺者　山桝直好

東伯郡偉人と後々から尊まれた直好は、幼時淺津村原田翁につき勉學した。明治五年加藤貞一を下田中村に聘して自家の藏を學校とし、村內の子弟を就學せしめた。明治十二年頃「農業者が農事に暗いから收益が少ない故に富んだ者が少ないが、元本邦は、農業國で其の國本たる農民の富は卽ち國家の富である。」との意見で時の郡長に諮つて久米郡農學校を創立した。是れが鳥取縣立農學校の基である。

山瀨前農學校長は、其講堂を名づけて祥雲閣と云つたが直好の雅號を取つたのである。又、生徒の用筆に祥雲と名づけたのも其德を忍ぶのであつた。

明治十四五年頃は、此地方非常の旱魃で小鴨川には水無く三北條の灌漑水も皆無で田は悉く龜裂を生じた。翁は中河原村中井甚三郎を訪ふて「隣村に火事が行けば水を落してやり、或は、消防に出掛るてはないか今は三北條の田地は旱魃の爲め稻は枯れうとして居る。即ち、田地の火事では無いか見舞として水をやるが宜しい」と說いたので、中井は承諾した。其れから順次上方の堰に溯ぼつて說き日暮れに歸つて直ぐ使を北條にやり、水のくる手當をさせたのである。之れが例となつて上流の人は見舞として水を落し、下流のものは禮に行くことゝなつて久しい間、我田引水の喧嘩も、一朝美はしい狀態に歸した。翁は又た老人を大切にし天神野開墾の目的を以て牛馬市を設け、而して其の堆肥を櫨に給したことなどもある。產米改良と輸出奬勵の目的を以て江北村に私財を投して、倉庫四棟を建てた。又、翁は桑苗を隱岐國に賣込んだ。人は皆な損をすると言つて居た。翁は私の目的は隱岐を養蠶國にすれば目的が達せられるのだと、謂つたとのことである。斯んな風で、翁は農事に熱心であつたが、養嗣子、園太郎をして津田仙の經營の學農舍に學ばしめ、又群馬、栃木地方の養蠶をも傳習させたが、東伯郡に養蠶、製糸業の早く開けたのは翁も與つて力があつたのである。翁は米穀が溜ると官に獻納した人で、凶年などの時には倉を開いて窮民を施こし、貸金證書など燒いたことは人の知つて居る所である。

明治十七年頃翁は倉吉に公園を置くの必要を説いた。今の有親舘の所を開き養勞舘を建てやうとしたが、時の人は翁を目して氣狂ひだと言つたことは遺筆に見える「余が亂心は公園の亂心なり、故に公園の成功を見ば余が亂心は治すべきなり」と斯んな譯で資金參百圓も投じた事があつた。

續いて、養生舘を經營した。現今の同舘は旅舘專門だが其の起原は公園の變形である又行政、敎育、殖産に就き當局者に意見を述べ計畫を立てたことは實に夥しい、名工、宮本包則は一世の刀工であるが翁はこれを保護したのである尙ほ御來屋の埋木細工師西村宗一郎も翁に擁護せられた一人である。

家庭金言

（六六）

◉愛情は善き生活の基礎なり……（エリオット）
◉用心は臆病にせよ……（日本俚諺）
◉不用の物も七年藏すれば必ず用あり……（俚諺）
◉兒童は父母の行爲を映照する鏡也……（スペンサー）
◉健康は富に優れり……（英國俚諺）
◉敎育は天地自然の道理を敎ふべし……（ベーン）
◉父母の愛は諸德の基なり……（英國俚諺）
◉賓客を待つ必ず恭敬あるべし……（井上梧陰）
◉母の愛情は常に春時なり……（佛國俚諺）
◉家族團欒に優るものなし……（英國里諺）
◉五つ敎へ三つ褒め二つ叱れ……（育兒格言）
◉隨意の費用は其所得に超ゆべからず（ジョンソン）

奮勵　安住伊三郎

「蚊ほどうるさいものは無い。昨日も今日もぶんぶ　ぶんぶ。」と狂歌にうたつた人がある。夏の夜に蚊が居ないならばふものが出來て　蚊を防ぐことが出來る。其蚊取線香で有名な安住藥房を紹介しやう。

安住藥房で發賣してゐるのは「芳香蚊いぶし」「蚊取線香」「猪印蚤取粉」であつて蚊と蚤とを退治る藥である。製造元は大阪北區富田町であつて近年は內地に擴まつたばかりでなく、支那、朝鮮、シヤム海峽殖民地、蘭領印度、英領印度、阿弗利加、埃及、伊太利、佛蘭西、露西亞、濠洲ニユージランド、加奈陀、布哇、合衆國、南米諸國まで行き渡つた。かくの如く擴まつたのは商品が優れて立派であるによるのであるが、また廣告、意匠等に注意する所が深かつたからである。

同店の用ひるレツテルは、諸外國の言葉で記されてある、即ち支那語、西班牙語、マレー語、英語、露語の六個國にわたつてゐる。これ等は各國にひろまる上に大なる便利な点であつたのである。

店主、安住伊三郎は慶應三年一月生れで、因幡國八頭郡那岐山の麓の農家に育つた。「こんな片田舍に一生埋もれては。」と思つたのは、少年の時　志を立てた原因であつた。十一歳の頃作州落合町に行き、酒造家木村貝江氏に助けられて有名な進昇山の門人となり漢籍を學んだ側ら同家の事業を助けたが、さらに大志を抱き將來の發展地は大阪で有ると早くもこれに眼を附けた。「事若し成らざれば死すとも歸らず」堅固な意志をいだいて大阪に出た。時に齡二十二、明治二十一年七月、懷中僅に二圓卅錢を所持したのみである。當時同鄕の先輩で安東久次郎なる人が藥業であつたが、其店員となつて、

ケ年其間辛苦貯蓄し得た金は僅に三四十圓。明治二十六年これを資本として東區嶋町に出で、獨立賣藥に手を染めた。斯くして獨立した安住氏は志益堅く日夜寢食を忘れて商業に奮勵したから業務の發展により、更に店舗を平野町二丁目の要衝に移し、本業の傍ら人造護謨販買をした。一年に數千金を贏ち得たから其所得を擧げて資本となして明治二十七年初めて除虫粉の營業を開始した。この頃殺虫藥の原料である所の除虫菊は大部分獨逸から輸入したもので、日本産のものは至つて僅少であつた。すなはち年額參拾萬圓以上を輸入してゐたのである。

そこで氏は、この除虫菊を栽培する事は將來有望であると、この菊の産地を巡つて栽培を奬勵し、改良を加へ、あらゆる方法を以て多く産出する事を奬めたのであつた。その効はあらはれて、明治三十四五年の頃には、全く内地品ばかりで藥品が出來上るやうになつた。

そこで今度は出來上つた藥品の賣りひろめを考へねばならぬ。大阪では賣藥同盟組合、製藥同業組合などがあつたから、其囑託を受けて芝罘、天津、北京、大連、旅順、南京、蘇州、抗州、上海などの各地をしらべ、三十七年には朝鮮をしらべて販路をひろめた。其後支那に往復をすること數回香港、シンガポール、彼南、スマトラ、瓜哇の方も手をつけ、明治四十三年墨西哥獨立記念百年祭には其首府メキシコに開かれた日本品博覽會大阪出品人總代となつて行つた。其歸途には北米合衆國、英領加奈陀などをしらべたのである。

これ等の長い間、あるときは暑さに苦しめられ、あるときは寒さに傷められ、航海しては難船に遭ふなどの事が度々あつたが、少しも勇氣を挫かず、ますます奮勵したのであります。

今製造してゐる藥品は猪印蚤取粉、同蚊取線香、同芳香蚊いぶしを主なものとして昆虫液及び健稻液である。昆虫液は園藝に使用する殺虫液であつて健稻液は稻の害虫を驅除する液である其他に五福薄荷錠、反金丹、五福目藥、掃毒丸等であるが其原料は本邦産の植物を使用するものである。こゝに面白いのは商標としての猪である。猪は印度地方では甚だ嫌はれてゐる獸であつて、猪のついてゐるものは紙幣でも嫌といふ有樣だから蚤取粉も印度向のものは猪印を南京虫印に換へたのである、そして印度語で書いてあるのである。

工場は香川縣小笠郡四海村にあつて製粉を主とする。線香製作所乾燥室蚤取粉製作所に分れてゐる。工場内常に二百餘名の職工と、家内職工約三百名を使役しているといへば、これ東洋に於ける斯業のオーソリチーである。氏は尙進んで世界に於ける最優勝者たらん事に努力している。

日露戰役の際には各團からの注文を受けて多く製作した。又御買上を蒙るの名譽を得たことも度々ある。内外の博覽會に出品して金牌銀牌等を受けたことは數限りない。近く莫斯科(露國)の豪商クーザー氏は本國より遙々安住氏の猪印製品を契約せんと來朝し三十萬圓を締結した。一品能く此の巨額の取引を成立せしめたのは、氏の製品が積年内外に絶大の信用を博しつゝある結果に外ならぬのである。

公共的方面の氏は現今大阪商業會所議員其他各種團體の理事、委員等に選ばれて居る。尚ほ東洋貿易組合長となつて、輸出品に對する商業道德を守らしめて本邦輸出品聲價の發揚に努力した外、貿易に關する研究日夜怠りない。前記數回の渡航に我貿易界に貢獻した所少なくない。市の囑託を受けて近く露都を巡歴し我貿易を助るため渡航するのである。猶茲に特筆するのは大阪貿易學校創立の美擧である。即ち我國貿易の發達を謀らんとせば、第一に各國の語學に通ずる青年を養成せねばならぬ。就中發展せる大阪市に外國語學校なきをなげきこれが設立を主唱して大久保知事の賛同を得、今西林三郎、山田市郎兵衛、安住の三氏主査の任に選ばれ日夜努力した。遂に該校の設立を見るに至つた（現今四百餘名の學生を收容する）に到つたのは、氏が常に我國貿易界に盡せる効績である。氏の如きは本邦貿易界稀に見る奮闘家で將來益々發展すべきは信じて疑はざる處である。

日置默仙

暹羅國に渡りて佛教の古蹟を尋ね、同國皇帝の戴冠式に列し、日魯戰爭の戰死者のため巨大なる護國塔を建立し、近くは米國桑港で開かれる萬國佛教徒大會に參列の爲め出發した學高く德深き日置默仙師は伯耆國東伯郡の人である。今年六十九歳の老齢であるが、元氣旺盛で日本各宗佛教の代表者として渡米してゐるのである。

師はまだ十二歳ばかりの惡戯盛りに、自分の弟の死に遇ひ、幼心に痛く人生の無常を感じたのが動機で出家するやうになつた。それから修學に修學を重ねて、佛學に達し布教するやうになつたのであるが、布教が巧妙であるばかりでなく其修養が至つて深く現代曹洞宗の第一人として推されてゐるのである。

かつて暹羅皇帝が御好意によつて、日本佛教各宗に佛骨を分與されたことがあつた。其時、默仙師は奉迎使に推薦されて同國に渡り、佛骨を我國に奉迎したのである。此事は佛教上の大なる事柄であつたのである。其後、名古屋に覺王山日暹寺の建立を思ひ立ち非常なる盡力によりて終に出來上つた。これは日本暹羅佛教徒の親善をはかる上には大なる效果のあつたことである。現暹羅皇帝ヴァシラヴァット陛下の戴冠式には我國佛教各宗を代表して同國へ渡り、其途次印度佛跡をしらべダージリンでタライラムに會見して日暹、日藏佛教徒の親善をはかつたのは、師一代の閲歴に新なる光彩を與へたのであつた。

師が　かつて日露戰爭の古戰場を巡錫し、戰死者の冥福を祈つた。序を以て孔子廟に詣でた事がある。此時に一つの逸話がある。此時、通譯官、總督府武官等が同伴で誰も騎馬であつた。師は孔子廟の前に至つて下馬しやうとするとき、馬が俄かに驚いて立ち上つて馬上の師を落した。同行の人は驚いて走せつけ、お怪我はなかつたかと見舞をいふと　師は平然たるもので笑つて云ふには

ひよつとした機に落ちて　頭をうつ
坊主ならこそ怪我（毛）なかりけり

と。衆のものは其器の大なるに驚いたといふことである。

其後　曹洞宗の管長に擬せられて、門弟等は是非師を管長に推さうとしたのであつたが、この話を聞いた師は

「衲はろんなものにならぬ。」

と一言の下にはねつけた。師の氣象によれば一度言ひ出したら再び後に引き還さぬから此事を知つてゐる門弟等は運動を中止したのである。此時は師の斡旋によつて福山默堂師が後董に當選するやうになつた。

大正四年二月遲羅國皇弟カンペングペヂ殿下が我國にお出になつて　かの默仙師が建立した　東山村覺王山日暹寺へ御參拜があつた。此日山門には遲羅國の大國旗をかゝげ殿下がお着きになると師は御先導となり本堂に御案内申し上げ梵鐘を鳴らして一山の僧侶二十餘名を集め大悲呪を誦して遲羅皇室萬歳の御祈禱を行はれた。殿下は先年前皇帝から御下賜になつた同寺の本尊黃金佛に恭しく御燒香があつた。又御分與になつた佛舍利にも御禮拜があつたのである。默仙師はなほ佛舍利奉安塔について委しく說明申し上げた。

師は大正四年八月初旬、桑港で開かれる萬國佛敎徒大會に日本各宗佛敎代表者として參列のため七月十日横濱解纜の天洋丸で渡米の途に就いたのである。此時「隨分暑いのでのゥ大儀ぢやが　佛の道を弘めるとすれば苦勞は無いぢや、夫れに愚衲は旅をしつけてるので何の屈托もない。ウン序にウィルソン大統領にも會つて來るつもりじや。」

と一絕を賦して

東走纔歇也西馳　不住生涯豈有期
到處無心與道合　青山唯見白雲奇

と。六十九歳の高齡でありながら其元氣は若いものを凌いでゐるのである。渡米は七十日の豫定で、印度カルカッタ大學の敎授山上曹源師が隨行。途中布哇に一週間留錫つて法話があつた筈であります。

諸名士

因伯に於ける重な人々は以上に列擧たやうてすが殘らず綱羅ことは困難てあります。何となれは時々刻々に事情か變つて來るのてすから己むを得ませぬ。こゝに以上の外種々の方面に活動いた人をあげると　明治維新の頃に勤王の議を唱へた人は伊丹甚太夫、田村貞彦、羽原傳藏、和田邦之助、神戸源内、川崎政之亟なといふ英才があり。堀庄次郎、安達清風、宮原積、景山龍藏、佐善元立、土肥實匡、山内衡等の文名のある人。飯田年平、中島宜門、小谷古蔭等の歌名の高い人。仙石隆明は足利三世の木像を斬つて幕吏と爭つて死し石川貞元、尾崎孝基が義擧に加はつて刑せられ　二十二士が京都の本國寺にある藩主の旅舘に入つて家老を斬つて

勤王の誠意を朝庭に申べた事。沖剛介、增井熊太、高濱正義、大谷顯忠、田村貞彦等皆此時代に傑出した人であります　又徽士として有名であつたのは前愛知縣知事沖守固、前諸陵頭足立正聲、伊王野坦等でありますが正聲は男爵に列せられました。豪勇の詫間樊六も二十二士の一人です。伯耆橋津の人中原吉兵衞は家産を傾け勤王志士を援けたのであります　明治維新後社會百般の事情が變化しましてあらゆる方面に人々の活動する天地が殖えて來ました。或は學問に實業に政治に軍事に宗教に文學に教育に或は社會事業にろれ〳〵力を盡すに至りましたから其方面の人々が、つぎつぎに出ました。醫學博士には村上安藏、藤田敏彥、田中鎬彥法學博士には加藤正治、佐々木惣市。哲學東攻の學者として西晋一郎。學術教育の方面に津田元道、細田謙藏、橋田邦彥、津山三郎、遠藤金市。音樂方面には田村虎藏、岡野貞一。文學者として杉谷代水、生田長江、藤原喜代藏、伊藤銀月。帝室博物館長として森本後凋。俳句俳文の阪本四方太。歌人として安木弘蔭、田中俊民、田中秋彥、太田垣蓮月。漢詩人としては田中長州。其他の方て松原二十三階堂。軍人側では陸軍中將侍從武官長内山小次郎、湯本主計總監、陸軍少將後藤常伴、岡田貫之、津川謙光、山本登喜次海軍少將梶川良吉。英文學者武信田太郎は氣高郡青谷出身である

官吏、實業會社等に關した方面では鐵道院の滿鉄理事藤田虎力、米原竹次郎矢野喜一。外交官で杉村恒造、澤田節藏。遞信省の久本爲藏。内務省の田賀奈良吉。前商業會議所副會頭の法橋善作。三菱炭坑の杉本惠。宮内官吏であつた栗原廣太。銀行業につくした第百銀行小倉穀重日本銀野々村政也、日本銀行太田豐藏、尾三農工伊藤義平、商業銀行秋山忠直、正金銀行森廣藏。海外留學に赴いてゐるもので筧正太郎、西尾壽藏。電氣技師として神戸順三郎。

公益を廣め社會につくしたといふ方面の人て石谷董九郎は岩美郡の人で大に社會の爲山陰鐵道建設計畫に盡力した。鳥取市では市制によつて獨立するとき盡力した田中政春。名譽ある藍綬褒章で表彰せられた東伯郡下北條岩本廉藏、西伯郡中濱村村田吉重。室孚にして起ち資産家となつて公會堂等を献納した吉村德平。圖書館盲啞學校私立女學校等の經營者遠藤董。育兒院を創立して救濟事業につくした尾崎信太郎。地方吉年の開發に任じてゐる柴田秀藏、君野順三。篤志家として知らるゝ東伯郡八橋の藤本重郎、佐伯元吉、長谷川熊藏。政治方面の人では西谷金藏、石谷傳四郎、濱本義顯。新聞記者として加藤房藏、大谷誠夫

境の木村久太郎は台灣鑛山業に。宗教界で著はれてゐるのが日蓮宗の北尾日大。曹洞宗の須和文孝。東本願寺寺務總長であつた米子西念寺住職であつた龍氏。近代刀匠名手としては日置兼次がある山陰道書家として牧野芝石は文人畫にも勝れてゐた。

因伯立志人物　終

鳥取佛教青年會編纂

代表者　岩田勝市　鳥取市立川町一丁目六拾參番屋敷

發行者　横山敬次郎　鳥取市上魚町四拾五番地

印刷者　岡村豊次郎　鳥取市西町百三十一番地

活版所　全所　岡村活版所

横山書店

鳥取市大工町筋
振替大阪四二六八番
電話三〇九番

不許複製

大正四年七月二十八日印刷
大正四年八月二日發行

正價拾五錢

大賣捌

發行所

鳥取市本町
振替大阪九〇參五番
電話貳貳番　尚文館書店

米子尾高町
振替大阪參〇八貳番
電話一六番　今井郁文堂

鳥取市東町
振替大阪八二六五番
電話貳四參番　平木久松堂

倉吉西町
振替壹參〇五四番
電話一九番　德岡優文堂

鳥取市本町
電話四七參番　光文館書店

鳥取縣物産陳列所賣店

鳥取驛前　土産館

●因伯昔話初版再版販賣統計表コヨル

鳥取　靜觀堂
同　博進堂
同　文武堂
同　島田書店
同　森繪葉書店
同　販賣所
中　販賣所
外　販賣所
菊　販賣所
瓦　販賣所
古　販賣所
鹿　販賣所
青　伊藤書店
若　鐵木書店
倉　桑田書店
米　內島書店
同　玉水書店
同　三吹書店
境　村尾書店
同　好治書店
同　文兵衛堂

土橋
手方詰町海野谷櫻吉子

岩田先生編

山陰道昔話

代八錢 送代貳錢

山陰道は古來著名なる傳說口碑夥しく古事記日本書紀等歷史上の書冊により山陰東西普く人の口にするもの〻中より採錄せり明月氣活の夜、雪窓孤燈の蔭希くは刮目して一繙せられよ

◉讀んで愉快に歷史を覺ゆるは本書なり

◉讀んで面白く講話の材料となるは本書なり

各雜誌大販賣

●前金又は郵便切手代用で送金被下候へば

ドンナ雜誌でも送りますから御注文下さい

鳥取市大工町筋

横山書店

振替大阪四二六八番

岩田先生編

自修用 日用文 **つゞり方**

代五錢 送代貳錢

清新な着想と奇警な觀察とについて作られた

る好箇の作文書であります極く手輕く平易に

書いてありますから一度讀んで御覽なさい

近代的に面白くお書きになる事は自由自在であります

※土產品に他國に居住せらるゝ人々よりの御注文多く漸く其緒につきました

この光榮を得ましたを深く御禮いたします

横山書店出版に

微力致しましてから僅か七年程にかなりませぬが著者の方より縣下同業各位あて販賣に書かせられ又縣下の多數の愛讀者と ※

博文館圖書

讀書家の一瞥を薦む

新刊累版の栞

並ニ最新刊の名篇佳作

鳥取市大工町筋（電話ヨコ）

特約販賣店 **横山敬次郎** 電話參〇九番

振替大阪四貳六八番

理學博士 山崎直方君
理學士 佐藤傳藏君 共著

齋藤文學士
大塚文學士
田山花袋君
其他數十名 補助

大日本地誌

全部拾卷

全部十

最新刊

第十卷 琉球及臺灣
方面地圖十枚（着色版）寫眞銅版二十餘頁 紙數七百餘頁
正價金參圓 小包料十二錢

第一卷 關東
方面地圖八枚（着色版）寫眞銅版八十一頁 紙數八百三十頁
正價金貳圓五拾錢 小包料十六錢

第二卷 奥羽
方面地圖八枚（着色版）寫眞銅版八十二頁 紙數八百八十頁
正價金貳圓五拾錢 小包料十六錢

第三卷 中部
方面地圖九枚（着色版）寫眞銅版八十六頁 紙數九百八十一頁
正價金貳圓五拾錢 小包料十六錢

第四卷 近畿
方面地圖六枚（着色版）寫眞銅版二百圖 紙數千二百七十四頁
正價金參圓 小包料十六錢

卷完成

第五卷 北陸
方面地圖二枚（着色版）寫眞銅版八十六頁 紙數七百五十二頁
正價金貳圓五拾錢 小包料十二錢

第六卷 中國
方面地圖一枚（着色版）寫眞銅版四十八頁 紙數八百四十頁
正價金貳圓五拾錢 小包料十六錢

第七卷 四國
方面地圖四枚（着色版）寫眞銅版五十六頁 紙數六百八十頁
正價金貳圓五拾錢 小包料十二錢

第八卷 九州
方面地圖七枚（着色版）寫眞銅版七十一頁 紙數千二百五十頁
正價金參圓 小包料十六錢

第九卷 北海道及樺太
方面地圖拾枚（着色版）寫眞銅版八十四頁 紙數千七十餘頁
正價金參圓五拾錢 小包料十六錢

我邦出版界に於ける空前の大著述と讃美せられ學界の偉蹟と嘆賞せられたる本書は、編纂主任として山崎理學博士佐藤理學士專ら其の蘊蓄を傾盡せられ、補助として幾多の學士文士專門家約二十人を算し各其擔當せる部門に於て心血を濺ぎ、苦辛慘憺、前後十有五星霜を經、多大の物質的犧牲を拂ふて、茲に全部拾卷約壹萬頁の大出版を完成す。其の體裁の斬新にして優越なる、叙述の詳細にして多方面なる、地圖の精確にして明快なる、寫眞の鮮美にして豐富なる、實に本邦地理學上他に匹儔なき大著作と言ふも誇言に非らざるべく、一度本書を繙けば日本帝國の地理、宛として眼前に映ずる如くならむ。

大判春皮總布紙國入裝釘美麗
總紙數約壹萬頁
每卷地圖及寫眞版數十葉挿入

日本一周

田山花袋君著

足跡日本に遍き著者が新たに試みた作である、著者は其得意とする印象的小說的描法を用ひて縱橫に日本全國のカラーを描かうとしてゐるのである、歷史と地理との關係、英雄と美人との遺蹟、殊に日本の歷史に就ては最も興味ある批評と描寫とを試み其の上に新らしい藝術的氣分を漲らしてゐるのが此の作である。

三五判裝釘頗雅麗
紙數各約七百餘頁
地圖及寫眞版豐滿
每編金壹圓貳拾錢
郵稅各十二錢

前編 東海・近畿〔三版〕
中編 中國・九州・四國〔新刊〕
後編 關東・東山・北海・北陸〔續刊〕

田山花袋君著

新撰名勝地誌

全十二册
中判各五〇頁
各六十錢
郵稅八錢

全部書目

第一 畿內
第二 東海道西部
第三 東海道東部
第四 東山道西部
第五 東山道東北
第六 北陸道
第七 山陽道
第八 山陰道
第九 南海道
第十 西海道
第十一 北海道樺太
第十二 臺灣及琉球

日本昔噺

嚴谷小波先生
墨田湖山先生
共編

誰でも知らぬ者は無い昔噺のお跡のお噺はこれでございます。大判の本で表紙の美しさ、挿畫の奇麗で澤山な、讀んでも見ても素敵に面白いので、お坊ちやんにもお嬢さんにもやんやゝと賞められて、賣れるは賣れるは大評判、學校の賞品に適く、家庭への贈答に佳し、それで價が拾錢です。お菓子やお玩具の代用に是非共お勸め致します。

正價一册
金拾錢宛
郵稅一册二錢

(1) 桃太郎續話 太田三郎畫
(2) 浦島太郎續話 小島沖舟畫
(3) 大江山續話 片山春帆畫
(4) 花咲爺續話 岡野榮畫
(5) 雲雀山續話 山村耕花畫
(6) 一寸法師續話 岡落葉畫
(7) 猿蟹合戰續話 小島沖舟畫
(8) 安達ケ原續話 名和永年畫
(9) 牛若丸續話 近藤紫雲畫
(10) 文福茶釜續話 岡野榮畫

最新刊
(11) かちく山續話 小島沖舟畫
(12) 松山鏡續話 岡落葉畫

エミール・ライヒ著　内田魯庵君譯

獨逸の誇大妄想

大判洋裝三百二十頁
原色版寫眞版三枚
正價八拾五錢
郵稅拾錢

現歐洲讀書界を風靡し拜獨信者の迷執を打破する刻下無比の快著

本書は、現に、ベルンハルヂーの狂暴なる主戰論と對立して、歐洲讀書界に空前の刺戟を與へつゝある無比の快著にして、政治的著述家として名聲夙に天下に喧傳する有名なる維納大學校教授が、同盟國としての忌憚なき獨逸排斥論也。主として其の狂暴なる鑿々時局に適中し、世の拜獨信者をして顏色なからしむ。

フオン・ビユロー著　問崎萬里君譯　**獨逸外交政策**　正價六拾錢　送料六錢

東亞同文會調査編纂部編　**山東及膠州灣**　正價金貳圓　送料十四錢

日本中學校々友會編纂

天台道士著作集

大判總布上製函入
石版寫眞版六枚入
紙數六百三十餘頁
金壹圓六十錢
送料內地十二錢

天台道士杉浦重剛先生

還曆記念出版

內容目次

鬼哭子
鬼笑子
鬼怒子
樊噲夢物語
日本教育原論
哲學こなし
倫理書
教育論纂
鬼哭論集
鬼哭年表
航英日記
梅窓一朶
病餘々錄

天台道士杉浦先生は一世の高士にして又一代の國士也、天下等しく其高風を欽せざる無し、先生本年四月を以て還曆の壽に達せらる、日本中學校友會は其の祝意を表せんが爲め、先生年來の著書を總括して記念出版と爲せるもの即ち此書なり、高士の面目に接し國士の精神を知らんとするの士、願はくば一本を座右にせられんことを。

工業叢書 第六十二册

農商務省工業試驗所技師 工學博士 辻本滿丸君校閲

油脂工業試驗法

中判洋裝五百七十頁 精密圖版七十個入

正價壹圓五拾錢 郵税十錢

上野誠一君著

本書は著者が油脂研究上の蘊奥を傾注したるものにして

第一編 所在採製精製分類 第三編 試驗及研究法

第二編 組成及油脂の化學 第四編 油脂工業製品

(食用工業用日用油脂硬化油、脂肪酸、グリセリン工業、石鹼、蠟燭、塗料減摩劑、酸化吹入重合油、リノリウム印刷インキ、ロート油其他一般の工業製品)の製法性質試驗法につき詳說す、斬新精細且つ確實にして懇切を極め最も實用的なり、油脂工業に携はる者は勿論苟も化學工業に關係ある者は、必ず一讀せざる可らず。

既刊 工業叢書 中の類書

工學士 田中宗一郎君著 ■ 脂肪油脂肪及蠟 金八十五錢 郵税八錢

工學士 矢野道也君著 ■ 油類工業分析 正價金五十錢 郵税六錢

工學士 市川俊雄君著 ■ 水及油 正價金五十錢 郵税六錢

工學士 淺田忠順君著 ■ 石鹼製造法 附西洋洗濯法 正價金七十錢 郵税六錢

農商務省興津園藝試驗場長 農學士 恩田鐵彌君著

改訂 增補

實驗園藝講義

菊判洋裝クロース上製 石版刷三枚寫眞版二十四枚 紙數六三八頁木版六十八個入

正價壹圓七拾錢 小包料十二錢

大增補八版

本書は園藝界の泰斗と仰望せらるゝ恩田農學士の著にして發刊以來異數の驩迎を受けたるもの、而も著者の斯學に熱心なる、更に既刊書に於ける缺陷を補正し、新たに得たる實驗と學說とを添加し、其紙數に於て實に約三百頁の大增補を爲す、斯書愈々完璧を得たりといふべし。文章は平易簡快、講述は明晰精確、加ふるに挿圖の豐富又た他に類比あるなし。而も此倍大せる改訂に於て價格僅に斯の如し、豈に至廉ならずとせむや。實地家の參考書並に講習書又は教科書にも適し斯業者及教育家の必讀良書也。

最近既刊類書

東北帝國大學農大教授 農學士 星野勇三君著 ■ 最新果樹栽培講義(上) 正價貳圓三拾錢 送料十二錢

農商務省興津園藝試驗場長 農學士 恩田鐵彌君 内田郁太君 著 ■ 實驗柑橘栽培法 正價參圓 送料拾四錢

農學博士 橋本左五郎君校閲 農商務省月寒種畜牧場驗試 農學士 樋口敏郎君著 ■ 實用牧羊法 正價五拾五錢 送料六錢

中等教科難問解說

本書は著者等が多年教授上の實驗より中等程度の教科書中より、あらゆる各科に就て說明を要すべき事項術語等を悉く採錄し平易にして的確なる解釋を與へたるもの、之を座右に備ふれば懇切なる教師の講義を聽くが如く、學生の復習、若くは受驗場に向はんとする者には尤大なる參考書に讓らざる唯一の良師友たるべし

▼既刊書目▲

□1 教科難問 日本歷史解說 京北師範中學講師 文學士 山川直五郎君著

□2 教科難問 西洋歷史解說 眞岡中學教諭 文學士 佐藤秀男君著

□3 教科難問 東洋歷史解說 廣島高女教諭 陸軍教授 阪本哲朗君 杉浦隆次君著

□4 教科難問 算術解說 京北中學講師 島野復之君著

□5 教科難問 代數解說 京北中學講師 島野復之君著

□6 教科難問 漢文解說 東京工業校講師 石崎棄園君著

□7 教科難問 國語解說 東京工業校講師 石崎棄園君著

續刊

▼動物植物解說 ‖ ▼生理・衛生 鑛物・植物通論 解說 ‖

洋裝半截判 每冊三百廿頁

正價各冊 卅五錢

郵稅各冊四錢

新式作文大成

文學士 武島羽天君
文學士 大町桂月君
文學士 久保天隨君
共著

人間は感情の動物なり、事に觸れ物に從ひて喜怒哀樂の情暫らくも胸裏に起らざる事なし、是の故に叙情の文程、人間に興味を與ふる者なく、又叙情文の心得程人間に必要なるものなし、是の書、現代名家の傑作より各種の叙情文を撰び來つて、絶妙の好辭、殆んど網羅せらる。笑ふべく、悲むべく、醉ふべく、恍惚たるべきの文章、一々應接に遑あらざらしむ、殊に前半に添へたる叙情文の作法は種類方法を細說して餘蘊なし、文に志すの士必ずや讀むべきの良書也。

第四號

作法 作例 叙情文

正價各五十五錢
郵稅各八錢

大判裝幀瀟洒・紙數每編三百餘頁

既刊

第一編 文章法
第二編 作法 作例 書翰文
第三編 作法 作例 叙事文
第五編 作法 作例 儀式文

續刊

第六編 作法 作例 議論文
第七編 作法 作例 叙景文
第八編 評註 現代名家文

卅版累

- 二十版 樗牛全集 **文藝及史傳** 壹圓五拾錢 送料十二錢
- 二十版 樗牛全集 **想華及消息** 壹圓五拾錢 送料十二錢
- 第十版 **高山樗牛と日蓮上人** 正價金壹圓 送料八錢
- 三十六版 樗牛文篇 **文は人なり** 正價金壹圓 送料八錢
- 四十八版 **天地有情** 金貳拾五錢 送料四錢
- 四十三版 美文韻文 **黃菊白菊** 金貳拾五錢 送料四錢
- 四十八版 散文韻文 **雪月花** 金參拾五錢 送料六錢
- 第十四版 美文韻文 **花紅葉** 正價參拾錢 送料六錢
- 第十一版 俳諧例句 **新撰歲事記** 金七拾五錢 送料八錢

- 卅版 **紅葉全集**（六卷） 壹圓八拾錢 送料十二錢
- 十版 **一葉全集**（前編） 壹圓七拾錢 送料十六錢
- 九版 **一葉全集**（後編） 壹圓貳拾錢 送料十二錢
- 百版 **此一戰** 正價金壹圓 送料八錢
- 第十二版 殉難 **佐久間大尉** 金四拾五錢 送料六錢
- 第十七版 **大日本歷史**（下） 貳圓五拾錢 送料十六錢
- 二十五版 家庭 小說 **小公子** 金參拾五錢 送料六錢
- 三十二版 家庭教育歷史讀本 **花の白雲** 正價十八錢 送料四錢
- 三十二版 家庭教育歷史讀本 **紅葉の錦** 正價十八錢 送料四錢

六佳選

- 第十五版 **明治壹萬句** 金參拾五錢 送料六錢
- 第十一版 **新撰壹萬句** 金四拾五錢 送料八錢
- 八版 **俳句資料解釋** 正價參拾錢 送料六錢
- 各十冊版 **謠曲評釋**（全六冊） 各參拾五錢 送料各六錢
- 第十六版 四書新釋 **中庸** 正價貳拾錢 送料六錢
- 第十九版 四書新釋 **大學** 正價拾五錢 送料四錢
- 第十四版 **書道講習錄** 正價金貳圓 送料十六錢
- 第十五版 **世界格言大全** 正價四拾錢 送料四錢
- 卅版 **明治書翰文大全** 正價五拾錢 送料八錢

- 三十二版 家庭教育歷史讀本 **枯野の雪** 正價十八錢 送料四錢
- 第十五版 **代數學難問解義** 正價六拾錢 送料六錢
- 第十八版 **算術手引草** 正價五拾錢 送料六錢
- 第十八版 **圍碁布石法** 正價拾五錢 送料二錢
- 二十二版 **青年訓** 特價廿五錢 送料四錢
- 二十四版 **編物指南** 金四拾五錢 送料八錢
- 九版 **惣菜料理** 金四拾五錢 送料八錢
- 第十二版 改訂袖珍 **日本昔噺** 正價八拾錢 送料八錢
- 二十三版 **書翰文大成** 正價金壹圓 送料十二錢

千頭清臣君　杉浦重剛君　監修

偉人傳叢書

大判上製各三百餘頁・每卷口繪及挿畫挿入

正價各壹圓　郵税各八錢

(1) 諸葛亮　杉浦重剛君著　猪狩史山君著　(5)

(2) 坂本龍馬　千頭清臣君著　(6)

(3) 西郷南洲　長谷場致堂君著　(7)

(4) 奈翁と其元帥　千頭清臣君著　續刊

(1) 豐太閤　樋瀨中將著

(2) ネルソン　肝付中將　大原文學士著

(3) 熊澤蕃山　奥田博士著

(4) 吉田寅次郎　杉浦重剛君　世木鹿吉君著

既刊と續刊

第八編　ビスマーク

子爵　清浦圭吾君序文

海軍中將男爵　肝付兼行君

文學士　常田宗七君　共著

二十餘年間宰相の印授を佩び獨逸帝國を再建し歐洲平和の擔保者たりしビスマークは遂に現獨逸皇帝カイゼルと爭ひて政界を勇退せり、彼れの一代記は實に十九世紀後半期の歐洲史にして本書の第一目的は其生涯を論述して讀者の修養に資せむとするにあり、此偉人が外交的大機略を語るものは其第二目的なり、近世歐洲列强の國際關係を究明し現下歐洲大動亂の根本的由來を紹介せむとするは其第三目的なり、此趣意より敢て本書を世に薦む。

□口繪　コロタイプ版一枚　寫眞版三枚

□挿入圖版十七個

□紙數三百二十八頁

新刊

最新刊

□社會的國民教育　一名青年義勇團　田中陸軍少將著　正價三十錢

□校註國文叢書(15)　義經記・承久記・北條九代記　正價壹圓三十錢

□新式作文大成(5)　作法作例　儀式文　正價五十五錢

□圍碁講義(4)　置碁定石(上卷)　正價四十錢

□學校家庭　お話の種(下篇)　少年の部　少年世界編輯部編　七拾五錢

□株式投機奥傳　嘉藤運之助君著　正價九十錢

□大正四年五月改訂第三改訂增補　製圖便覽　松尾哲太郎君著　正價壹圓四十錢

□縮刷　酒道　女道　樂樂　村井弦齋君著　正價壹圓

博文館出版目録

往復葉書にて御申込次第送呈

東京本町　博文館

277
297

賜天覽

宿繪刷

出版

一戰

東京市本町

博文館

卒遽

第拾版

出版以降百版を重ね拾數萬部を賣り盡したる希世の名著改裝成る

苟も日本國民たる者必ず此不朽の大戰史を永く子孫に傳ふべき也

東郷元帥
片岡大將
上村大將
題字

加藤中將
伊地知中將
小笠原大佐
題辭

海軍中佐 水野廣德先生著

■附錄■
公報死傷者人名表

洋裝三六判新鑄活字裝釘清酒本
大判地圖五文四百餘頁 寫眞版十七枚
木版圖廿七個

正價金六十錢 郵稅六錢

發賣 鳥取市大工町筋 横山書店（振替大阪四二六八番）

●山陰道昔話 八錢
○隱德太平記 壹圓五拾錢
●因伯珍談 拾參錢
○壯烈二十士 拾參錢
●鄕土地理と歷史 拾參錢
○因伯立志人物 拾五錢
●荒木又右衛門 五錢
○古今因伯名物考 編纂中
●鳥取縣書畫百藝名人集 貳拾錢
○因伯大家落款印譜 編纂中
●鄕土地理と歷史 拾錢
○因幡民談記 貳圓
●椎茸養成案內 參錢
○因幡五百圓以上地價表 參拾錢
●鳥取市實測地圖 五錢
○鳥取案內 貳拾五錢
●因伯昔話 拾貳錢
○建築規矩術原理圖解 壹圓貳拾錢
●因伯人物誌 編纂中
○自修用つゝり方 五錢
●自修鳥取縣地理 近刷
●因伯市町村早見 五錢
○鳥取縣立入學試驗及第準備書 參拾五錢
●鳥取縣入學試驗問題集 六錢
○島根縣立兵庫縣立入學試驗問題集 七錢
●縣下の現狀 參拾錢
○鳥取市位數表 拾錢
●國民の財寶 參拾錢
○伯耆民談記 壹圓
●喜見山摩尼寺之緣起 參錢
○因伯の園藝 六拾錢
●山陰鐵道唱歌 五錢
○岩美郡の富 參拾錢
●鳥取市鳥取案內圖 參錢
○山陰道史蹟 近刷
●喜見山摩尼寺之圖 五錢
○川尻先生道話 拾錢
●心の寫眞 參拾錢
○畫伯名家一覽表 拾錢
●實力豪家財產錄 拾錢
○善光寺分身如來御傳記 參錢
●摩尼寺緣起書 五錢

●和本●洋本●唐本●寫本●本一切買入仕候（多數有之候へば御一報參上）鳥取 横山書店

●御照會の節は往復ハガキにて御通報被下度候

鳥取縣用

中等教育準備會編

入學試驗及第準備書

○正價 參拾五錢
○送料 六 錢

問題解答附

本書は入學受驗者の爲に多年苦心經驗と實地の研究により新しく出來ました。年々數千册を賣りますので、善良なる本と云ふ事が明瞭であります。親切叮嚀實際の試驗問題に一々解答を附け應用問題、優等生勉强法、試驗場の注意、學校の樣子、入學願書手續等漏れなく掲載してありますから競爭試驗に臨まるゝ人々は早く御買求下さい

發行 鳥取市大工町筋 横山書店

●鳥取、倉吉、米子各書肆にあります●

正價 貳拾錢 送料 四錢
發行 鳥取市 横山書店
發賣 鳥取縣各書肆

●鳥取縣師範學校分
○鳥取縣教育講習會分
●鳥取縣小學校教員檢定試驗分
○鳥取中學校分
●鳥取商業學校分
○鳥取高等女學校分
●倉吉中學校分
○倉吉農學校分
●米子中學校分
○米子高等女學校分
●島根縣立工業學校分
○島根縣立農林學校分
●但馬八鹿蠶業學校分

古今 鳥取縣書畫藝名人集

終